

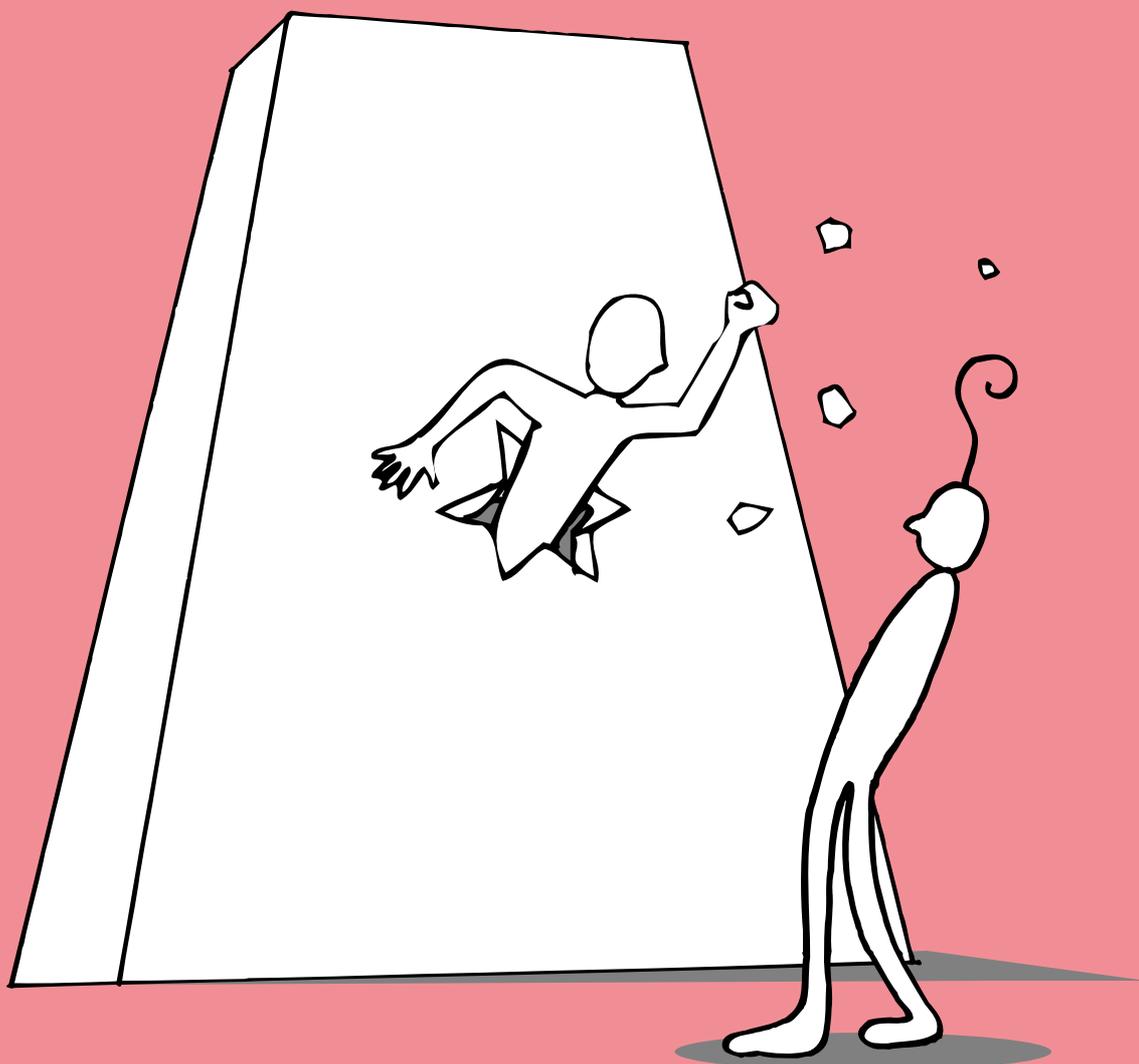
# Mellow Symposium

# メロウ・シンポジウム2004

## [報告書]

### “脱”シニア宣言

シニア・ビー・アンビシャス。光る年の重ね方を求めて



■開催日：平成16年3月5日（金）13：00～17：30

■会場：有楽町朝日ホール [有楽町マリオン12階]

■主催：財団法人ニューメディア開発協会

■協賛：財団法人 健康・生きがい開発財団 財団法人 シニア ルネサンス財団

社団法人 長寿社会文化協会

日本ウエルエージング協会

社団法人 日本テレワーク協会

社団法人 ビューティフルエージング協会 50音順

■後援：経済産業省

■協力：財団法人ニューメディア開発協会賛助会員 企業・自治体



4

## 主催者挨拶

岡部武尚(財団法人ニューメディア開発協会理事長)

6

## 来賓挨拶

岩田悟志氏  
経済産業省 大臣官房審議官 (商務情報政策局担当)



8

## 基調講演

輝く人生  
壁の向こうの



～シニアライフを豊かにする秘訣～  
養老孟司氏  
(東京大学名誉教授)

23

## パネルディスカッション 「光る年の重ね方を求めて」

～達人が語る、大いなる夢～

コーディネーター

竹内 宏氏

経済評論家、竹内経済工房主宰

パネラー(50音順)

●ITプラットフォームでシルバー支援

大川加世子氏

コンピューターおばあちゃんの会 代表

●第2の人生で独立開業

北川安洋氏

(株)ジーバ 代表取締役

●地域活性化に挑む

桜井一郎氏

NPO法人 早稲田創業支援機構 理事、  
早稲田大学周辺商店連合会 事務局長

●地域ボランティアにける思い

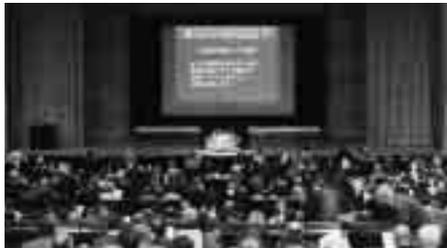
玉川雄司氏

NPO法人 京都シルバーリング 代表理事

●創作活動への情熱

長野ヒデ子氏

絵本作家



46

制作物一覧

48

ホームページ





# “脱”シニア宣言

シニア・ビー・アンビシャス。  
光る年の重ね方を求めて

- シニアが生涯現役を意識し社会の主役として、時代を切り拓く役割を担っているということを再認識していただく。
- 時代を切り拓く原動力となるのがシニアの豊富な“知と技”であり、豊かな年の重ね方を追い求める、チャレンジ精神です。
- 生きた事例紹介の中から、光る年の重ね方を求める、心の持ち様と具体的な方法について考え、シニア立志の契機となる、シンポジウムを目指します。



## 平成16年 3月5日 金曜日

昨日の雨もあがり、晴れ渡った有楽町。  
開場へむけて準備が整えられていた。



出演者の皆さんは、シンポジウムの進行、パネルディスカッションなどの打ち合わせ。



晴れ、多数の方々にご参加いただきました。



スタッフが待つ中、  
いよいよ開場、  
参加者がぞくぞくと  
入場受付に



開場を待つ人々。列が出来てしまいました。



午後1時、  
開会が告げられた。

養老先生もスタンバイ。



主催者挨拶

財団法人  
ニューメディア開発協会理事長  
**岡部 武尚**



# “脱”シニア宣言

## シニア・ビーアンビシャス。光る年の重ね方を求めて



財団法人ニューメディア開発協会の岡部です。主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

3月5日ごろといえば虫が穴から出てきて活動する時期ですが、気候はまだ寒く、虫もまた穴へ帰りそうな陽気でございます。そういう中、非常に多くの方々に参加していただきまして、心よりお礼申し上げます。

さて“メロウ”というのは、コクのある、円熟したという意味で、暗にシニアを指しております。そういったシニアの方々が社会で活躍され、素晴らしい社会を作ろうという考えで経済産業省のご指導を得まして、そしてメロウサエティ構想の一環として当シンポジウムは15年も続いております。

いよいよ世の中は高齢化が進んでいる訳ですが、現在すでに65歳を越える方の比率が19%を越え、あと10年もすれば25%、4人に一人は65歳以上になる時代を迎える。世界に類を見ない状況を迎える国になる訳です。私も本年で61歳になり、シニアの仲間入りをしますが、高齢という言葉は好きではありません。私たちは「シニア」しかも「アクティブシニア」という言葉を使っております。シニアの方々が大いにアクティブに活動し、ご自身の残りの人生を豊かに過ごしていただきたい。またシニアの方々は今までたくさんの経験をお持ちですので、それに裏打ちされた技術、知



識を日本の国、世界の発展に活用して頂きたいと思っています。

さて、世の中一時の不況も脱し、景気も若干回復してきています。ニューメディア開発協会は名前どおり新しいメディア、主として情報化の分野で活動しておりますが、情報家電のプラズマディスプレイ、薄型テレビ、携帯電話、DVD、デジタルカメラ、あるいは、インターネット、ブロードバンドなど様々な分野での情報化が進んでいます。この情報化というツールを活用してシニアの皆様が大いに活躍していただきたいと思っています。

協会では全国にシニアネットという組織化を図っておりまして、コンピューターの知識のあるシニアの方々に先生になっていただき、いろいろな地域、コミュニティーでお年寄りや若者に指導していく組織があります。これまで全国に150のシニアネットが立ち上がり、指導者の方々も1300名になりました。この技術を利用すればいろいろな活動や趣味などが効率よく進められることとなります。自分の自宅に居ながら地方のお孫さんと月4千円で無制限にテレビ電話が使えるという新しい世の中になりつつあります。その中で、今日のテーマであります“脱”シニア、アクティブシニア、シニアのアンビシャスな活動を大いに進めて行こうと

いうことでございます。

本日はこれから今一番人気があり、世の中のオピニオンリーダーでもある養老孟司先生にご講演をお願いしました。それから、70年代、80年代、日本の経済の高度成長期にお世話になりました竹内宏先生のコーディネートにより、5人の先生方にパネルディスカッションをしていただきます。皆様ぜひ最後まで充分堪能していただきたいと思っております。この開催にあたり、経済産業省のご後援、多くの関係団体の協賛を頂きまして、高い席ではございますけれどもあらためて感謝を申し上げて開催のご挨拶とさせていただきます。



来賓挨拶

経済産業省 大臣官房審議官  
(商務情報政策局担当)

岩田 悟志 氏



## “脱”シニア宣言

シニア・ビーアンビシャス。光る年の重ね方を求めて



ご紹介いただきました経済産業省の岩田でございます。「メロウシンポジウム2004」開催にあたり一言ご挨拶申し上げたいと思います。

只今、岡部理事長からお話がありました通り、このシンポジウムは15年前にスタートしましたが、当時通商産業省では、メロウソサエティ構想というのがありました。主旨は、「急激に進展する高齢化に対応するために、ゆとりがあり、豊かで活力のある高齢社会の創造を目指し、情報システムを活用して高齢者の積極的な社会参加を支援する」というものでした。この主旨は綿々と生き続けていると思います。

私自身は昭和28年生まれで、母は大正14年生まれで今もたいへん元気にやっております。さて、若輩者になるかと思いますが、メロウソサエティ、あるいはシニア、高齢化社会という表現に関してやや違和感を覚える点が2つあります。

ひとつめですが、政府が行う経済統計など、いわゆる予測・統計は当たらないといわれており、実際政府の経済見通しは過去当たったことがありません。その中で唯一人口統計・人口予測は当たらずといえども

遠からずという比較的確度の高い予測が出ておりまして、このことから申しますと今日の人口構成はなるべくしてなったものであり、一年一年積み重ねて連続的な構造変化が起こってきたものと考えられるわけです。そういった状況の中で我々は実際に生活し、生きているわけですので今さらながら高齢化社会というのは違和感があるなと思います。

2つめですが、2010年には高齢化率25%という数字があります。65歳以上の高齢者が3千万人いることになる。これだけの数というのは、むしろ我々の社会の中ではメインプレーヤーではないのかと考えております。その意味でシニア・高齢者の方々がどの様に考え、行動されるかということが重要です。

昨日の日経新聞にシニアを対象としたアンケートの調査結果が掲載されていました。回答していただいたのは、首都圏、近畿圏の60代の方1379人です。それによりますと60代でパソコンを使いこなしている方—45%、孫や子供のより自分のものを買いたいという方は、全体の3分の2、資産総額は一世帯当たり3千6百万円、あえてシニア向け表示の商品・コーナーでは買わないという方—74%ということでした。ちなみにITという面では友人との交流や美味しいお店を探

すなど半数の方がパソコンや携帯を利用しておられるようです。もう少し細かくみてみますと、メールをよく使う方—25%、インターネットで情報収集されている方—27%、そのうち買いたい商品や国内旅行といった面の情報収集をされている方—52%、薄型ハイビジョンテレビをお持ちの方—36%、この結果は当然シニアの方々の傾向を表しているわけですが、また今の日本社会と同じ傾向であるといえるのではないのでしょうか。

本日会場にお集まりの方々には働き手あるいは消費者という立場から、いずれにしても経済社会の担い手であるといえ、また、地域のコミュニティの担い手、そして社会のメインプレーヤーであると思います。おそらく21世紀にはGDPの成長率は1%~3%で推移すると予想されておりまして、その中で新しい豊かさを求めてどうやって生きていくのか、我々の世代を含めて日本全体の問題と認識しています。本日のご講演、シンポジウムを含めまして皆様のお智恵がいろいろな形で生まれてくることを期待したいと思っております。

最後に皆様方のご健勝、ご活躍、本日のシンポジウムの成功を祈念いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。



基調講演



東京大学名誉教授

養老孟司氏

昭和12年神奈川県鎌倉市に生まれる。昭和37年東京大学医学部卒業。1年のインターンを経て、解剖学教室に入る。以後解剖学を専攻。昭和42年医学博士号修得。平成元年『からだの見方』（筑摩書房）でサントリー学芸賞を受賞。平成7年東京大学退官。

平成8年北里大学教授に就任（大学院医療人間科学）。平成10年東京大学名誉教授に。平成15年北里大学退職。

主な著書：『ヒトの見方』『人間科学』（筑摩書房）『唯脳論』（青土社）『涼しい脳味噌、正統』（文芸春秋社）『身体の文学史』『バカの壁』（新潮社）『毒にも薬にもなる話』『まともな人』（中央公論社）『自分の頭と身体で考える』『養老孟司の<逆さメガネ>』（PHP研究所）『ガクモンの壁』『アタマとココロの正体』（日本経済新聞社） 他多数

# “壁”の向こうの輝く人生

～シニアライフを豊かにする秘訣～

養老でございます。後ろに映っているものですから、動いたら逃げられるのかなと思って確かめたのですが、カメラがついてくるみたいですね。私は歩くクセがありますのでどうぞお許し頂きたいと思えます。じっとしていると言葉が止まってしまうと、歩かないとしゃべれないのです。奇妙なことに、本を読むのも座っていると頭に入りませんので、よく歩きながら読むというクセがありまして、私はほとんど二宮金次郎と同じなのです。

すごく立派な講演の題になっていますが、ご紹介いただいた通り、元々の商売が解剖で、相手してた方が全部亡くなっている方でした。しかも献体で、ご本人が亡くなれる前に解剖して結構ですよと言ってい

ただいた方々だったものですから、ほとんどが年配の方です。シニアとか高齢化社会とか言っていますが、私は学生の頃から解剖の教室は高齢化社会でして、70以前の方は滅多に亡くなりませんので、高齢化社会というよりあたりまえとっていました。乱暴なことを言いますと私の人生はお墓に入る前にちょっと家へ寄ってくださいといった感じでした。

その頃、印象に残っているのは、よく老人ホームに慰問に行っておりました。言葉は悪いのですがお得意さまでしたのです。そこの方たちが、この歳になって、お国のお世話になって、別に何にも不自由していないし、死んで役に立つのなら、こんな嬉しいことはありません、と言って下さる方が結構居まして、それで献体を希望される方が多かったのです。そこへお見舞いに行ってみじみ思ったのは、女の人は元気だなということです。何年も続けて行きますので、顔なじみになってしまうのですが、毎年同じ方が出てこられて、まだ死ななくて申し訳ございません。といつも言っておられました。この中に男の人が入っているともうだめで、ハッキリ言えば大体が呆けちゃうんですね、私がしみじみ思うのは今難しいのは男の生き方だなと、それはお年寄りに限らずです。

なぜそう思ったかと言うと、こういう講演を始めてだいぶなりますが、今日はこちらが明るくてそちらが暗いものですから、皆さんの顔がはっきり見えないのですが、両方明るい、一応皆さんの顔を見ながら喋る。顔を見ながら喋ると時々非常に機嫌の悪い顔に当たる。当然その人に気付くまでしばらく喋っていますから、何かまずいことを言ってしまったかと反省をしながら喋ってその方の顔を時々見ますと最初から最後まで同じ顔なんです。だから、あれはああいう顔なんで俺のせいじゃないと確認して安心するのですが。そういう人が多いと感じるんですね。それで、もうお分かりだと思いますが女性はそんなことはないんで、だいたいオバサンは元気でよく笑ってます。なんで男の人は機嫌悪いのかというのが一つあるんです。もう一つ、大学では若い人、二十歳ぐらいの人たちと何十年と付き合っていますが、非常に目立つのが教室に入っていくと前の方に座っているのが女の子で男の子は必ず後ろに居るんです。大体ドアの近くで何

かあったら逃げようと殆ど中腰ではないかという感じで座っている。私はこうマイクを持って歩くクセがありますから、歩いていっているいろんなことを聞きますと、男の子は殆ど返事をしません。言語障害ではないかというほどで、例えばイラク派兵をどう思うかと聞くと「いいと思います」と最初に言うわけです。次に君はというと「同じです」と、君は、また「同じです」と、次君は「同じです」、4人ぐらい同じですが続くとさすがに次に同じですというと怒られると思うのでしょうか、次の奴はなんて言うかという「わかりません」、じゃその次の君はと言うと「わかりません」とまたずっと続く。これは何だろうかと思うのですね。

男の子の生き方というのを戦後、この50年間どのくらい真剣に考えてきたのかという気がしてきました。私の年上の従姉妹が幼稚園の保育さんをしてた40年～50年ほど前のことですが、近頃の子供を誉めるのに何というかという、「元気で活発でいいお嬢さんね」「おとなしくて、よく言うことを聞いて、いい坊ちゃんですね」と誉めるのよと言ってましたから、すでに50年前から始まっているんですね。その結果がどうなったかという、男性の寿命と女性の寿命にえらく差が付いてしまった。平均寿命がですね。これを放置しているのは私はまずいという気がしました。しかも男女共同参画社会とって、男女共同参画はいいのですが、完全平等で考えると女性が残ってしまう。どこが平等なんだろう、と。これは若い頃からそう思っていて、ヨーロッパからフェミニズムの偉い方が来まして、日本の女性は抑圧されているということをおっしゃるから、そうですかとそれは一応認める。でも、人間とは抑圧すると寿命が延びるんでしょうかねと言うわけです。

男の子の育て方といいますが、実はお母さんが育てているわけですから、男の子だけがぼつんと世の中に存在しているわけではなく、男女の関係の問題であります。そこを多少手抜きしてきたのではないかと思うのです。イラク派兵というのがあり、賛否両論ありまして賛成が若干多い。その裏は何かと言いますと、たぶん男の子です。つまり男の人の働く部分というのが、ああいうものであれば日本人の一般的な感覚として受け入れられやすい。ですから、テレビ



によく隊長さんの顔が出てますが元気ですね、どう見ても。あのような元気な男の人の顔を私はあまり見たことがない。よく大写しになるのは麻原彰晃や道路公団総裁など、はっきり言えばろくな顔が出てこない。女性ですと大臣でも元気なおばさんがいますね、扇大臣とかね。この間、テリー伊藤さんと話していて武士道の話になりました。ラストサムライとかが流行っていますが、現在の日本は武士道じゃなくてオバサン道といったほうがいいのではないかと。なぜこの話をしたかという、今シニアという言葉を使っていますが、私も66歳になってシニアの仲間入りはしていますが、そういう立場で物事を考えますとどうしても過去のことを振り返るのです。過去のことを振り返るとそれをどのくらいちゃんとやってきたかということが一番気になります。

例えば子供を育てるということを考えますと、私が育った時代というのは特殊な時代で、小学校2年生で終戦ですから、所謂食糧難でした。いまだに私はカボチャとサツマイモを食べないのですが、これはへそを曲げて食べないのではなくて、体が分かっている、カボチャの中毒になっていたと思うのです。黄色いのはカロチンで肝臓に溜まります。カボチャばかり食べると肝臓の中にどんどん溜まって細胞がパンクしそうになる。体の方はそれが分かりますが頭の方は分かりませんから、カボチャだろうが何だろうが食べ物があればいいという時代でしたから食べてましたが、それを年という単位でやりますと、体が懲り、カボチャを見ると、だめだ食べてはいけないということになってくる。そういう世代なのです。

私はこのところ過去のことを考えます。亡くなった方とお付き合いしているだけです。社会のことなんか知ったことではない。(笑) このシンポジウムは経済産業省の後援とってましたが、経済も産業も何の関係もないんです、解剖は。それで、考えてみると私の育った時代は随分変な時代だったなど、その解釈がなんとなく気になってきました。

例えば、最近よく言うのですが、戦後の経済でいえば、ソニー、ホン

ダ、松下のものづくりとよく言います。そのものづくりをNHKはプロジェクトXとやってやっています。あれを見ると、車を作ったり、計算機を作ったり大勢の人が必死になっているわけです。今の若い人はあれを見てどう思っているんだろうか。なんであんなものに必死になったんだ、と。私自身が何で気が付いたかと言いますと、小熊英二さんという慶応の助教授の方が「民主と愛国」という本を書かれました。「民主」というのは戦後の合い言葉で、「愛国」というのは戦争中までの社会の合い言葉であります。なぜこのような題になったかという、その両方を通った方、戦中から戦後にかけて生きて人、典型的なインテリなんです。丸山昌夫、吉本隆明という人たちが「愛国」という言葉で何を言い、「民主」という言葉で何を言ったかということをもとめた本なのです。これは厚い本でして、余程暇でなければ読めないのですが、シニアの方で時間のある方は読んでみてはと思いますが、帯に何て書いてあったかという「私たちは戦後を知らない」と書いてあった。結構面白く読んだんです。読み終わってこれはまずいと思った。何故そう思ったかという、本の中身、吉本隆明や丸山昌夫が何を言ったかなんて何にも知らなかった。私たちは戦後を知らないという帯は若い人向けに付けたと思いますが、肝心の戦後を通った私があることを何にも知らないのです。それで考えた。どうして知らないのだろう。すぐに答えが分かった。「そんなことは知りたくない」「知る必要がない」と思ったことに気が付いた。

終戦の時、母の田舎に疎開して、叔母が一言「日本は戦争に負けたらしいよ」と言ってくれた。その瞬間に私はだまされたと思ったんですね。それは新聞にせよ大人にせよみんな日本は戦争に負けない、無敵皇軍と言っていましたから、この戦争は勝つと言っていましたから、だまされたと思った。さらに決定的にしたのは教科書に墨を塗ったこと。この中にどれくらい居られるか知りませんが国民学校でございまして、先生がここからここといって墨を塗って、真っ黒になったことを覚えています。同窓会でその話をすると、あそこで墨を塗ったから中身を良く覚えたよという話になります。そこで何を教訓として得たかという、活字になった新聞、報道など全部含めて一切信用し

てはいけません。信用してはいけないというのは倫理的にいけないということなんです。信用することが間違っている。ですから、今でもNHKであろうがテレビであろうが私は信用しません。つまり信用しないのが正しいと思っています。ああいうものは、報道する人の都合がまず第一にあり、次に中身がある、ということが、子供の時からのはっきりとした私の中の倫理であります。

だから私は自分の本にも本というのは間違っているものだから、ということをしよっちゅう書いています。それでも、先生の本はここが間違っていますと指摘してくる。私は間違っているもんだと書いているものだから、間違いが分かっているなら何の害もないじゃないかと返事も出さない。(笑)

ところが、私の少し上の方に聞くと話が違ってくるのが分かります。4、5年上の方ですと8月15日どう思いました、と大学の先生などに聞きますと「助かったと思った」と言うのです。私は小学2年生だったのですが6年生や中学生になっていると戦災で死ぬか、兵隊に取られて死ぬかと思っていたところに、戦争が終わったと言われて、「ああ、助かった」と思ったというのは、正直な反応でして、その世代が私の上に居るわけです。その上の世代がこの小熊さんが書かれた「民主と愛国」の世代で、なぜなら「愛国」という言葉を社会に向かって吐き、「民主」という言葉を社会に向かって吐いた、一人で両方やった人たちの世代なのです。私たちはその世代をどう思っていたかという、私たちが子供の頃は喧嘩に負けて帰ってきてぐずぐず言っていて、誰それに殴られたなど言おうものなら、親父に頭殴られて、負けた喧嘩にぶつぶつ言うんじゃないという時代でしたから、私にとって負けた戦争にぶつぶつ言うのは、そんなことは言うんじゃない。もっと大げさな言い方をすれば敗軍の将兵を語らずということであったので、知らなくて当たり前、負けた戦争についてあれこれ言うのはいやだ、と。じゃあ、あれこれ言わなかったらどうするのか。そこを私が言いたかったのです。小熊さんがああいう立派な本を書かれるとひよっとすると若い人は、戦後の日本人はそういうふうにと考えたと思いかねない。あれは本になっていますが、本にならない人は山ほどいたわけです。それ

は何かと言ったら、ソニー、ホンダ、松下でしょう。なぜなら、戦争に負けた、ボケてしてられない、こんちくしょうって思う。何で負けたかという物量で負けた。あるいは、あまりにも当たり前のことを無視した。大体、食料を持たせないで兵隊を出していますから。

平成7年ですか、戦後50年、いろんなことが起こりました。偶然ですがサリン事件もあの年だったと思いますが、その中で、「戦争と食料」という本が出ました。これは終戦直後に支那事変に従軍していたあるお医者さんが、ガリ版で刷った本なんです。それを全国の医科大学の図書館に送ったんです。そのうちの一冊が長崎大学から出てきて、戦後50年を記念して活版に変えたんです。その本を読んで驚いたのですが栄養失調です。つまり、その方は中国戦線に行っているわけですが、兵隊が戦場から病人として後送されてくる、その病気の診断ができない。病院に来るとぶらぶらして何にもしないで、元気がなくて、しばらくすると順に死んでいく。それがやがて栄養失調であることが分かります。栄養失調という言葉は実はそこで出来てくるんです。支那事変というのは太平洋戦争の前です。はっきりいえば最初から食料を持たせずに兵隊を出しているわけです。

私が言いたかったのは、そういう戦争を、日本人があれだけ特攻まで繰り出してやったことのどこが間違っていたのかということです。それは、あまりにも当たり前のことを無視した。当たり前のこととは何かというと、学問の世界では普遍と、どこの土地へ行っても成り立つということと、どの時代でもいつの時代でも成り立つということ、普遍かつ不変ということは無視したのではないか。だからそういう時代を通れば自然に、じゃあ変わらないものは何だという気持ちになる。どうしてかという、世の中が180度ひっくり返ったのですから。愛国が民主に変わったんですから。そう思ってプロジェクトXをご覧になるとよく分かるのではないのでしょうか。あれだけのことをやって負けたということ、世の中があれだけガラッと変わった、そこを物心つくかどうかで経過してくると、世の中で何を信じたら良いかということがおそらく今の方と違ってきます。そうすると自分でそれを追い掛けなくてははいけませんから、じゃあ変わらないものは何だと追い掛けてい

ったのが、よく聞かれるんですが、せっかく医学部に入ったのに何で解剖をやったんだと、これは同じ人間でも死んだ人ほど確かなものはないからなんです。解剖ぐらい確かなものはない。どのくらい確かかというと、ホルマリンで固定してありますから学生がやると3カ月ぐらいかかる。それで、一日の分済ませて、丁寧に布でくるんで次の日開けてみる。すると夜のうちに直っているということはないんで、ちょうど昨日の自分でやったところで止まっています。そういう意味で非常に確実なんです。しかも、いかに下手に解剖しようがそれは自分がやったこと、手足がバラバラになったこ



とも全部自分がやったこと、それ以外にないという職業は意外とないのです。臨床のお医者さんをしていれば患者さんはやって来るけど、来るたびに容態が変わっている。熱があつて、咳があつて、2、3日経って来るときには、おかげさまで熱が下がって、咳が止まると言っている。さもなければ、もっと悪くなって、入院して最期には死んじゃう。ともかく相手がどんどん変わっていきます。ところが私の仕事は相手が変わりません。これは絵描きとか彫刻家とかに似ていて絵がどんどん仕上がってきて、それがどんなに下手な絵でもそれは本人のせいだからです。そして仮に解剖して、お腹の中に胃袋が2つあったとしても、あったもの

はしょうがないと言えます。現の証拠がありますから。あつてはならないとかいいますが、解剖の世界ではあるものはあるものであります。それが、そういう育ち方をしてきた若者には安心のおけるものだったかということをご想像いただけたらと思います。

私はホンダ、ソニー、松下、つまり本田宗一郎や盛田昭夫が一人でやったわけではなく、あれだけの仕事をした人たちは、おそらく暗黙の内にそう思っていた人たちでないかと思うんです。ですからそれをプロジェクトXと申し上げました。そこは小熊さんの本には書かれませんが。



そして、もう50年遡ってみてください。実は同じことが起こっています。明治維新であります。明治維新であったらNHKは今度新撰組をやると言っていますけれど、新撰組にせよ、幕末の志士にせよ、維新の元勳にせよ、坂の上の雲にせよ、基本的には文化系のものです、ある意味では。ですが、明治維新後の日本は近代国家として産業が発達します。それだけではなく、先程ご紹介がありましたように私は北里大学にここ8年行っておりますが、北里柴三郎という人は熊本のだ田舎の出身であります。その人がベルリンへ行って、ノーベル賞を貰えるぐらいの仕事をしています。北里さんという人は、どうしてあんな仕事が出来たんだ、み

なさんよくご存じの野口英世だってまったく同じです。そうすると次々と名前があがります。企業はどうなんだと、いまだにある企業はトヨタであります。同じじゃないですか。徳川三百年、仁、義、礼、智、忠、信、考、悌と言ってやってきて、それをある日一朝にして変えた。ひっくり返した。福沢諭吉じゃないけれど封建制度は親の敵、それまでの制度はちゃらにした。全く新しい時代が変わった。そこを子供の頃通った人たちはどう思うか、世の中は決してあてになるものじゃない、ということ徹底的にたたき込まれます。じゃあ、あてになるものは何だ、何処へ行っても、どんな時代でも変わらないものだろう。それを子供なら追っかけるのだろうと思うんですね。そうやって出来たのが明治維新後の近代日本とよばれるものであり、戦後の日本であると思います。だからものづくりだったんです。

なぜこのことを言ったかという小熊さんの本がでるまで気が付かなかった。考えてみれば、私が解剖に入ったときに若い教授が2人おられまして、私が弟子入りしたのが中井淳之介先生、もうひとり細川修司先生、二人とも昭和20年の卒業なんです。その細川先生の言われたことをよく覚えていまして、細川先生がなぜ解剖に入ったか、先生は天下の秀才と言われ、当時の制度は分かりませんが、東大医学部の学生の頃、陸軍の軍医学校を2回受けさせられたという話があります。何で2回も受けさせられたかという、一回目の成績が良すぎて試験官がこんなはずはないともう一回受けさせられたという人です。私が入ったときは教授に成り立てで、38歳だったと思います。私に言われたのは、あの時代に大学を卒業し、医学の中で一番確実な学問は何だと考えたんだよと、それは解剖という結論になって、解剖を選んだんだと言って居られました。それを私が今でも覚えているということは、私が共鳴していたからです。

今、申し上げたことは歴史の中に出てこないことなんです。なぜなら、理科系と文化系の違いで、文化系が歴史を書きますから、そういった気持ちは表面には書かれませんが。ですから、何で日本人は戦後必死になってもものを作ったんだというのは、ある意味では、戦争の継続であり、戦争の反省でもあります。私たちは子供でしたから、戦争にも行けませんでしたし、頭

ごなしに戦争に負けたよと言われても、それまで勝つという教育を受けていたものですから、納得いかないわけです。納得いかない人間はどうすればいいかというしょうがないから、たった一人で戦争することになります。たった一人で戦争するというのも変ですけれど、私は自分の一生を考えてみると、どうもたった一人で戦争をしてきた気がするんです。それは何も反米とかいったケチなことではなく、あれだけ日本人が一生懸命やったことのどこが間違っているんだということです。間違っているんなら、そこを直して、次はなんとかしてやろうと思ってここまで来たんだと思うんです。それが、普遍・不変です。これよく考えてみると、昔の人は真理と言ったんです。

今、大学は山ほどあって子供が減るのに大丈夫かなと、いずれつぶれるとかいっていますが、その大学の建学の精神とか調べると真理と言う言葉はひとつも使われていないと思います。おそらく死語になっています。そのところに時代がよく表れていると思います。だいたい真理なんてこそばゆくて、恥ずかしくて言えないよということでしょうが、もうひとつは本気でなくなっただけでしょうね。変わらないものは何だろうと、今の人を追いつけるかといったら、追いつけないと思います。つまり分からないと思います。なぜこの話をシニアの前でするかということ、年配の方が自分の過去のことをどう考えるか、それをどう若い世代に伝えるかが非常に大事なことだという気がするからであります。年をとったということはそれだけの時を生きてきたわけで、もう一つの問題はそれを肯定しているかどうかということでもあります。今の例で言いますと、本多さんか松下さんか知りませんが、私が助教授時代、30か40歳の頃に、小学校しか出てなくて偉くなった方が、奨学金を作る。若くて貧しいから学校に行けない、大学に行けないという人のために奨学金を作るという記事が新聞に載った。私は、朝食の時でしたが何でこんなことをするんだよと女房に言ったんです。人がいいことすることにあんたが文句言うことないでしょうとたしなめられましたんですが。なんでそう思ったんだろうとまた考えた。その方は小学校しか出てなくて、一生懸命努力してそこまでいかれたんです。で、若い人にじゃあお前も俺と同じようにやれとど



うして言わないんだろうというのが素朴な疑問だったので。みなさんどうでしょう。自分自身が生きてきて、今余裕が出来て、若い人にお金を出そうというときに、そのところをどうお考えでしょうか。私はどっちかと言うと俺はカボチャを食って生きてきたから、子供もカボチャ食ってりゃいいという方であります。それは随分乱暴な言い方ですけど、それがひょっとすると明治維新以降の日本に一番なかったことなんじゃないかと、なぜそれを言うかということ、それがないと教育が困るんです。俺はこうやってきたけど、おかげさまでこの程度だったけどお前は違う風にやれと言って人生は成功するものなのでしょうか。少なくともシニアの人がきちんと考えてないと若い人はどう考えていいか分からなくなるのは当然であります。ですから私は福沢さんが言ったという、封建制度は親の敵というのは非常に印象に残るのです。封建制度は親の敵といって封建制度を潰したんですが、じゃあ福沢さんの息子というのは何をどう考えたんだろうと思うんです。福沢さんの息子になると封建制度は親の敵とは言えないんです。なぜなら、封建制度はもうないから。そういうことよりは、変わらないものは何だろう。封建制度が近代日本になっても変わらないものは何だろうということなんじゃないでしょうか。だからそれが北里さんであり野口

英世になったのではないかと思うんです。それは年配の方が自分の過去を基本的には肯定しているのかしてないのかという問題です。

つい最近、オウムの麻原彰晃の判決があって、私も朝日新聞にごそごそ言わされたんですが、私には大きな事件だったんですが、あそこに登場した人物の中で気になる人物がいました。林郁夫です。この人は医者で慶応大学医学部出身で医者として立派に勤められていて、それがサリン事件の実行犯になります。サリンを撒き、捕まった後、無期懲役で服役しています。もちろん私が医者で同業だということもあります。「オウムと私」という本を書かれて、私はその本を買ってきて読もうと思ったのですが未だに読んでいないのです。それは本の内容が聞こえてきちゃったからで、それは自分のやったことを反省しているということなんです。それを聞いた途端読む気がなくなったんです。何故かと言いますと9年も医者をやって、その根本は人助けです。患者さんの命を何とか助けようというのが医者の仕事です。それがあきらめきかたけで、サリンを持ち込んで人を殺そうと思うのには、余程大きな気持ちの変化がなくてはならないわけです。私が知りたかったのはそのことなんです。いったいどうして医者が殺人犯になろうと思ったか。それが捕まって刑務所に入ったら反省しているというのを聞いたら、これはもう読みたくないなど、そんなにころころ変わるものかと。その林郁夫への疑問というのが後味悪くて頭の中に残ったんです。ある日、はたと思ったんです。さっき言った、封建制度は親の敵と明治維新から列強に互して立派な国を作ろうとやってきたのは、慶応大学を出て、普通のお医者さんとして社会でちゃんと生きてきた林郁夫であろうと、それが何のきっかけか気が付くと大量殺人になっていました、それが戦争です。終わったらそれを反省したと称して、模範囚として服役をしています。そしたら林郁夫の人生って、明治以降の日本の生き方そのまんまじゃないのかと思いました。あれが日本人なんじゃないかと。じゃ、その根本は何処にあるかといいますと、歴史の問題です。歴史の問題というのは自分が生きてきた過去の問題です。ですから先程の本多さんか松下さんか知りませんが自分が社会の中で生きてきて成功してお金も儲かった。

それが本当に成功したと思うなら、本当に普遍かつ不変の生き方であるならば、若い人に自分と同じようにやれと、言えるはずであり、言わなくちゃいけないのじゃないかと思ったのです。もちろん、いろんな考えがあると思いますし、それを非難しているわけではないのです。俺と同じようになんて、今の若い人にははとも出来ませんよと学校へいきなさいという親切な気持ちなのかも知れません。若い人はそんなもんはいらねえよとお前が貧乏して偉くなったんなら俺も貧乏して偉くなるとそれはそれでいいのです、考え方にも生き方にもいろいろあります。実際に我々がどこまで物事を本気で考えてきたかということを気にしているわけです。最近、若い人に言いたくなるのが、お前どこまで本気だという話をしたくなる。それが本にも書いたのですが、一昨年、高橋秀実さんという方が日本中を歩いて面白いルポを書きました。その中で一番面白かったのは、富士山の麓の青木ヶ原の樹海、延暦年間の噴火で出来た溶岩原の原生林なのですね。紀元800年のことです。富士山が噴火して、当時は浅間山の鬼押し出しのような状態だったと思いますが、大きな溶岩原ができて、1200年以上経って、今になったら大原生林になっている。そこは磁石が狂う、入ると出られないという話があるんですが、実は現在そこは、自殺の名所になっていて、そこで首をくくる人が多いんですね。その話を高橋さんが書かれていたんです。村の人が道を歩いていたら、青木ヶ原の樹海から出てきた人がいて、朝だったので、やったなと思った。田舎の人で、親切ですからそばに行き、「どうなさったんですか」と聞いたら、本人が言うには、「いや、高い木の枝で首をくくったら、枝が折れて落ちた」。村の人は、「それで、だいじょうぶですか」と言ったら、「いやー、びっくりした、死ぬかと思った」と言ったというんです。(笑)その話で私は一日中笑っていたんですが、これも戦後の日本人をよく表しているなと思いました。本人は死ぬ気で首をくくっているんですよ。だけど枝が折れてみるとびっくりした、死ぬかと思った……。後の死ぬかと思ったの方を私は本音と言います。前の思い詰めて死ぬのは本音じゃない、多分嘘ですなこれは。首をくくったのは何処まで本気か、と。だから、ビルの上で飛び降りると言って騒

いでいる奴に止めようと飛びついていたら、飛び降りようとしていた奴が、危ないじゃないか、と言った。これも同じことです。私がさっき新聞とかテレビとか信じない方が倫理だと申し上げたのは、なかなか通じないと思いますけれど、そういう目から見ますと、どこまで本気だよという事の方が現代では多い。何でそんな話をしているかという、大事なことは年寄りも年寄りとして自分の人生をいかに正当化するかということ、自分がこれまで生きてきたんだから、生きてきたということは様々なことを切り抜け、通り抜けてきた



はずであります。それを若い人にどういうふうきちんと伝えるかということである。それは建前なんかではないんで、今から何か得をしようというんじゃないんですから、それを率直に言わないと社会が真っ直ぐに立たないと、私はそんな気がするのです。それを言わずに諦めてきたとこはないか。だから戦争のことについても、今でもいろんな事が出てます。私も読みますが、やっぱりその時に言わないでいるということは自分でも気が付かないんです。ですから今になっても考えなければならぬのではないかな。ちゃんと考えれば気が付きうることであります。そう思って申し上げたんです。私も60過ぎるまでそんなことを考えたことはないんです。何で解剖だったんですかと聞かれ

るから、死んだ人は煩くなくていいと結構出鱈目を言っていた。本当にまじめに考えると、確かなものを求めるという気持ちが私の中にあっただということが分かるんですね。そう思えばと考えると、次々に思いあたるのが出てきますから、多分そう思っているんだらうなと思ったんです。だから明治維新まで含めて大げさな話ですが申し上げたんで、もちろん若いときにそういうことは夢にも考えてません。今になって考えてみるとこういうことじゃないのかなという話です。そういうことは、歳をとらないと話せない話だらうと思うんです。年配の方がそういう筋を通さないと社会がぐらつきます。青木ヶ原の首吊りみたいに思い詰めた状況に若い人はすぐなってしまうから、それは違う、お前それは嘘だらうと言わなくてはいけない。どこまで本気だと。それはしょっちゅう感じることであります。まあ、やらしておいて本人が懲りるまでやらせることも大事ですが、最初に言い出した男女の問題でも流行りで決めてきたところがないかと、アメリカで男女平等と言っているから、ということでやる。この間も大峰山というところを世界遺産に登録して貰うのに、女人禁制の山をやめてもらおうと署名運動をしているというのがありまして、私は余計なことだとすぐ思いました。女人禁制のまま出してみても、だめだというのなら、何でだめなんだとそこから初めて議論になるんで、それを相手の論理を先取りしていくことはないんです。歴史とか伝統とかいうものには無意味なものがたくさんあります。無意味なものを全部消していったら、みなさん方が全部意味のある存在かと言ったら、これはまたとんでもないわけで、人生の意味というのは生きていた間一生懸命探していくものですよね。そのことを丁寧に書いた人がいまして、ビクトル・フランクルという医者なんですが、「夜と霧」という本を書きました。アウシュビッツに入れられて生きて出てきた人です。これも複雑な事情が裏にあるのだらうとこの歳になると分かってきますが、両親も妹も兄も全部収容所で殺されているんです。彼だけが生き延びたんです。それが本当に運かと私は疑っているんです。いろんなエピソードを読みますとどうもそうではないという気がしてくる。つまり周りの人があいつだけはともかく助けようと思っただけかと思えないんです。例えば、アウシュビ

ツの中でガス室へ入れられるのに100人ぐらい並ばされている。100人までできて入れられ殺される。 فرانクルがたまたま99だか100人ぐらいに並ばされたところへカポーという囚人頭みたいのがいて、そいつが誰かに殴りかかって、あたかも列に連れ込まれるのを逃げた奴を捕まえたふりをして列に押し込んでしまう、フランクルは最後ですから、外れるんですね。で、殺されないで済んだ。これは明らかに意図的にやったのではないか。カポーがそういうことをしたということは、収容所所長も暗黙のうちに知ってたんじゃないかと私は思うんです。ようするに書かれたものを信用しないから、必ず裏を考えるんですけど、彼は最期に印象的なエピソードを書いています、だんだん砲声近づいて来る、つまりソ連軍が来るんです。それが通り過ぎたら、ドイツ軍の負けですから、自分たちは解放される。その日、砲声が聞こえてきて、さすがにもう解放されると皆喜んだ。が、収容所側はトラックを用意してそれに乗せられた。フランクルも乗せられて、もう助かったと思っていたら、フランクルともう一人が用を言いつけられる。前の晩に死んだ囚人の仲間を森に埋めてこいと命令される。ふたりは泣く泣く行きます。それで戻ってみると誰もいない。それで助かったんです。トラックに乗せられた連中はみんな殺されたんです。この時も私は、神の采配でもなく、偶然でもなく、おそらくあいつは外そうという意識が働いたに違いないと思うんです。彼の一生の仕事は何だと言うと、彼は精神科の医者なんです。若いときからやってたことは、他人が人生の意味を発見すること、それを手伝えることが彼の仕事である。晩年のアンケートでもそう答えている。これはそんなことをしたら、ぐるぐる回しになってしまうんじゃないかということになりますが、でもそこに人間と人間の関係のある種の真理がある気がする。あなたの人生の意味を発見するのが私が手伝える、そのあなたは次の人を手伝えてとぐるぐる回しになって、それで終わりになっていいんじゃないかという気がする。彼は同時にそれはすなわち人間の社会、我々の仲間ということですね。人生の目的とか意味とかいうと、我々の外にあるような気がするのですがそうじゃない、もう一つ彼が言っていることで、人生の意味というのは自分の中にはないとは

っきり言ってます。そういう状況を通った人がね。ときどきこういったところでお話になることで気になるのは、私のための・・・、自分の・・・、というのが出ますが、人生の本当の意味とは自分の中に留まるものではないと、私は何となく分かる気がする。どういうふうに生きていくのが幸せかという、私の母親は95歳で死にまして、呆けていませんでしたから、大変やっかいで、開業医だったんですが、頭は呆けてませんし、体は丈夫だった。さすがに90を越えたら腰が痛くて歩けない。一人で開業していたんで、そこに介護用のベッドを持



ち込んで、90でたおれたからもう起きあがれないだろうと、相談して病院に入れた方がいいんじゃないかと言ったんですが、本人は頑として行かない。姉は病院に入れろと言いましたが、私はまあいいだろう、同級生の医者が近くに居ましたから、面倒を見て貰うことにして、家においたんです。一年経ったら、何と起きあがりやがって、その時には私はだまされたと思って、90で寝たらもう起き上がれないと決まってるのに、あれは寝る必要はなかったと。だから若い人には年寄り人を騙すから気を付けた方がいいよと、甲羅を経てますから回りの人間を騙すぐらいなんでもないんです。そうでなきゃここまで生きてこれないです。その時に姉の所へ行ったら、ほらご覧なさい、あの時病院に入



れておいたら今頃死んでるのに、って言ったんですよ。確かにそうなので、みなさんがたも気を付けた方がいいです。今の病院なんか、即座に抗生物質や細菌いわゆる院内感染を拾ってアウトになる方が多いんだから、あんなのやめた方がいいと私は思っている。そんなことを言ったら医師会に怒られますからあんまり言いませんが。で、母はどうしたかといいますと95で自宅で死にました。じゃ病院に何時行っただかというのと60歳のときに東大病院に連れて行ったんですが、それ以後一度も行ってません。医者だったこともありますけれど。私はそんなことを気にしたってしょうがないというのが根本的な考えで、生きる死ぬというのはまさに運命であり寿命であり昔から分かってるんですが、自分の考えでどうこうなるものではないと思っています。NHKの人が前に聞きに来て、「老いと死」というテーマで、死ぬことをどう思っていますかと聞かれ、そんなこと何とも思っていないと答えると強がっているとか建前とかに思われちゃうんです。インタビューしている人と喧嘩のようになってしまう。インタビューしている自身が死ぬことはなんでもないとすることを

信じてないんですね。自分がそう思っていないから。私はしょうがないから、こう説明した方がいいと思って、私が死ぬんじゃなく、どっかの爺が死ぬんだと言っているんです。どういうことかという、今の人は自分是不変変わらないと思いでいますから、死ぬのは今のこの自分が死ぬんだと思っている。冗談じゃない、末期の患者さんが何を見て、何を感じているか分かりっこない。私の先生が昨日告別式だったのですが、私より若い者がしょっちゅうお見舞いに行くんですよ、その先生が何度も見舞いに来るそいつに向かって何と言ったかという、「おい、あんまりせかすな」と言ったんですね。(笑)まあ、偉い人ですな。泣いてました、言った人は。実は私が言っていることも、先生が言われたことを私流に、今流に言い直してるところがある。例えば東大に教養学部というところができまして、そのころの東大の先生方は教養とは何だと議論されたに違いないんで、飽き飽きしたんでしょうね。一言よく言うんですよ、「教養とは何だ。人の心が分かる心をいう。」とそういう人でした。私は年配の方が若い人に向かってどうするのかとしょっちゅう思いますから、それだけ言っ

ておけばいいのじゃないか。何か知っている。何を覚えたというよりも、お前友達の気持ちが分かるか、年寄りの気持ちが分かるか、子供の気持ちが分かるか、ということで、それだけでほとんどいいのではないかという気がする。それを本気でやらないのが今の教育の問題なのだと思います。話があちこち飛んだようですが、こういう話ですから、結論なんかないわけで。ひとつは年配の方が自分自身の人生をどう考えるかということが、他の世代、若い人たちと相対するときの一番大事なポイントになるということを上記したつもりです。どこまで本気かということもそれに伴ってますし、どこまで人を理解するかということもそれに伴っています。それから、人生の意味とは何かと、若い人が年寄りに聞くことだと思いますので、それを自分自身で答えられるというより自分自身で解答を出していかなければならないのではないかということを上記して終わりにしたいと思います。どうも、ご静聴ありがとうございました。

## ■ 質疑応答

**司会:** どうもありがとうございました。では、早速なんですがこの機会を生かしてください。養老先生に質問がある方、ぜひ挙手していただきたいんですが、いかがでしょうか。

**質問者:** 楽しいお話ありがとうございました。先生が前にインターネットの中に笑いをもち込んだ方がいよいよおっしゃったことを覚えてるんですが、今のお話を今日いらっしゃっている方が、昔の事実とかその辺の話をですねインターネットに流してもらいと非常にいいと思うんですね。そういうことはいかがでしょう。

**養老先生:** ありがとうございました。しっかり覚えておきます。

**質問者:** 先生のお話は解剖という普遍なところを基点にして考えを巡らされておられると理解させていただいてますが、そういう時に変な宗教じゃないのですが

神様とか仏様というか、自分じゃないものとの関わり方が知りたいなという気がするんですが。

**養老先生:** それはですね、ちょっと長い話になっちゃうんです。宗教というか絶対者との関係でありますね。私は中学・高校はイエズス会の経営している栄光学園という当時修道院が一緒になった、神父さんがたくさんいる学校で育ちましたのである程度キリスト教については習ったんです。ですがクリスチャンではありませんし、ただの日本人です。いわゆる特定の宗派に属していないという意味でも、典型的な日本人だと思います。だけど私は外国で宗教を書かされたら、仏教と書きます。病院の書類にも宗教は書かされるんです。それは、あたりまえで病院だと死にそうになりますから、死にそうになってから神父の代わりに坊さん呼んできたら面倒なことになりますし、それぞれの宗教で死ぬときの儀式・行事などが違ってきますから、当然病院側としては宗教を知らないと困るわけです。そこに平気で無宗教と書くのは日本人ぐらいのものなんです。死んだ後の扱いも違ってきます。直接は関係ないんですが、真理ということ考えたときに、何らかの絶対なものを目の前に置くといのがおそらく世界中の普通の考えなんだと思うんです。この前、インド人の書いた本を読んでましたら同じ事が書いてありまして、日本人に対しては、そういうものがないということをインド人が書いてますね。自分がある絶対者と正対する、真向かいに向かい合った、そういう存在であるという感覚を日本人は持ってないと、そういう経験をおそらくしていない。そこから出てくるそういう人たちの表現は、「日本人は生きられない。生きていない。」と、これはどこで気が付いたかと言いますと、留学生新聞を作っているある中国人の留学生が京都の大学に行って、その方がエッセイ集を出した。私は書評の関係でそれを読んだ。割合面白かったんですが、現在その中で覚えていることが一つしかないんです。彼が車で京都、東京間の旅の途中で、大道芸を見せながらヒッチハイクをしているドイツ人を乗せるんです。ドイツ人と中国人の二人連れが車で京都まで帰るその道中でどういう話をしたかとか書いてあるわけです。最後にまったく筋に関係なくドイツ人が下りがけに、「日本人は生きられ

ませんからね」と言った。中国人はそれに同調しているんです。その言葉が私にはそのエッセイから理解できないんです。何の関係があるんだろう、と。だけどその言葉でふたりともそれまでの話を了解している。さらに偶然ですが、今年の1月にスリランカから来ているお坊さんと1時間以上話をしました。これも今の中国人の話と同じで、前後にどういう話があったか覚えていない。はっきり覚えているのは、彼が突然、「日本人は生きてませんからね」と言ったことです。世界の人に聞いてみてください。日本のことを知っているという人に、そういう人たちが共通に持つ感想のひとつが、「日本人は生きられません、生きていませんから」というのがある。それとさっき申し上げたことにどんな関係があるかという、例えば真理の問題についても、どこまで本気かということはそういう絶対者と正対する形での真理というふうに外国人は感じていると思います。私は日本人ですからそう感じていない。ただどこまで本気かという表現をしました。私は自分の外にある絶対者との関係で自分を定義するということは出来ません。この歳になって、イスラムやユダヤ教、キリスト教に改宗するわけにもいかず、いかずというよりも必然性を自分が感じなければ意味がないわけですから。だからお前が考えている真実は何だと言われたって今程度の話しか出来ないわけです。私の立場としてはどこまでも疑うことでしか真理というものを考えることが出来ません。でも、それで不安も感じませんから、それでいいんじゃないかと自分では勝手に思っています。どこまでも疑うというと、非常に疑い深い人のように聞こえるでしょうが、長年続けていると安定した立場になるわけで、誰が何を言おうが所詮あいつが言っていること、何事が起ころうが所詮は目が見ていることですから、だから私は唯脳論という本を書いたのです。みなさん方が世界をどうぞ覧になろうとそれは脳が見ていることでしょう、と。だから私はそういう絶対者をお持ちの方にはこう言い返すのです。あなたがそう思って見ている絶対者だってあなたの脳が見ているんでしょう。それが証拠に寝ている間に見えますかというようなことを聞くわけです。いかにみなさんが何かを確かだと思ってもそれは起きている間だけの話であります。そして、確かだと思



っている意識はどれだけ確かかといいますと、一日の三分の一はないのです。三分の一どころか学生をみていると半分以上意識がないんです。そんなものをなんで当てにするんだと私は思うんです。そんなものを当てにするから、車に爆弾を積んで突っ込むようになっちゃうんだと言うんです。たまには寝ているときに自分が何を考えているか考えてみなというわけです。

**司会:**ありがとうございます。では、最後の方とさせていただきますましょう。

**質問者:**先生のお話の最後の方で教養とは、心を感じる心だと伺ったように思います。解剖学の先生から言うと人間の心とはどこにあるんでしょうか。

**養老先生:**これはよくみなさんが疑問に思われることなんだと思います。これもきちんと説明すると面倒くさい話で、ただこういうふうにご理解頂いたらいいと思うのが、物事には場所のあるものとないものがあります。だから場所のないものについてどこにあるかという質問をするのは実は質問が間違っているんです

ね。例えば、我々は運動ということをよく分かってますが、運動ってどこにありますかって言われた瞬間に、動いているんだからどこにもないとなってしまうんです。心というのはそういう意味で働きです。働きというのはあるようで実は場所がありません。ですから西行も書いてますが桜の時期になると吉野の桜の所に、心が行っちゃっているというのは、そういう意味で心の所在は自由自在で、ホーキングがビッグバンのことを考えていれば、宇宙の始まりに心が行っちゃっているんで、そうでしょ、天文学者が宇宙の果てのことを考えているときには、自分の心が宇宙の果てまで行っちゃっていると思って差し支えないものだと思います。ですから心が何処にありますかという質問は、最初心が何処にあると決めた人が間違っているんで、場所を特定してはいけないもののひとつであります。

**司会者:**ありがとうございました。残念ながら、お時間がまいりました。これで基調講演は終了とさせていただきます。養老孟司様長いお時間ありがとうございました。どうぞ大きな拍手でお見送りお願いいたします。



### ●コーディネーター



#### ■竹内 宏氏 経済評論家、竹内経済工房主宰

1930(昭和5)年静岡県生まれ。東京大学経済学部卒業後、日本長期信用銀行に入行。一貫して調査畑を歩み、長期総合研究所理事長を経て、1998年12月より経済評論家として独立、竹内経済工房を設立。テレビではNHK「ビジネスネットワーク」「一億人の経済」「ビジネスサテライト」等のキャスターを務めた。一方、趣味のスキーや清水次郎長研究、静岡県浜松市の企業リサーチ、高齢者の生き方等これまでの蓄積とネットワークをもとに本にまとも多数出版。主な著書は、ベストセラーの『路地裏の経済学』『とげぬき地蔵経済学—購買意欲を刺激するシニアの心の掴み方』『これが「IT革命」だ!』『浜松企業 強さの秘密』『路地裏の名老学』他多数。現在は、(財)静岡総合研究機構理事長、静岡アジア太平洋学術フォーラム組織委員会委員長、静岡文化芸術大学国際文化科教授、姫路獨協大学特別教授も務めている。ホームページ：<http://www.ne.jp/asahi/takeuchi/hiroshi/>

### ●パネリスト(50音順)



#### ■大川加世子氏 コンピューターおばあちゃんの会 代表

1997年高齢者の自立の必要性から、奔走の末に初めてボランティアによる全国的なネット「コンピューターおばあちゃんの会」を立ち上げ、高齢者パソコンサロンの草分けとなった。活動の中で「わらべ唄」の消滅を危惧し会員の肉声や子供たちの声で収録。NHK国際放送などで各国に放送され話題に。また、孫たちのためにと残した戦争体験を綴る企画「私の8月15日」も、外務省から5カ国語海外こどもニュースで放送され世界的に反響を呼んだ。現在、総務省電子政府・電子自治体推進本部有識者懇談会メンバー。著書『おばあちゃんのパソコン指南』(筑摩書房)。ホームページ：<http://www.jijibaba.com>



#### ■北川安洋氏 (株)ジーバ 代表取締役

1931年(昭和6)年佐賀県生まれ。福岡商科大学(現福岡大学)卒業後、(株)東洋空機製作所、(有)山下釣漁具に勤務。1967年、釣り用疑似餌のトップメーカー(株)デュエルの前身である(有)洋釣漁具製作所を設立。同社を退任後、1997年に(株)ジーバを設立。「シルバーのシルバーによるシルバーのための企業」をモットーに、福祉介護機器の開発・製造・販売を手がける。趣味は、発明、ゴルフ。好きな言葉は、「我以外皆師也」。「シルバーのことは、シルバーに任せなさい」ということです。いろいろな時代を生きてきた分、我々シルバーには若い人にはない武器がある。これまで培ってきた技術や経験、人脈をフル活用すれば、ビジネスチャンスは広がるはず」と日々奔走している。佐賀県在住。



#### ■桜井一郎氏 NPO法人 早稲田創業支援機構 理事、早稲田大学周辺商店連合会 事務局長

1947(昭和22)年東京生まれ。1971年早稲田大学政治経済学部卒業。1982年早稲田大学周辺商店連合会事務局長に就任後、20年来早稲田大学と共に早稲田のまちづくりに従事。商店街活性化、高齢社会問題、生涯学習、創業支援に関わる。団塊の高齢化社会に関する活動も展開。1999年ワセダのまちづくり会社(有)ワセダウェーブ設立。取締役役に就任。2000年、コミュニティビジネスの可能性について探る「小さな創業フォーラム」を開催。2002年には「中高年からの起業が日本の元気を作り出す」をテーマにイベントを開催、起業者養成講座「早稲田・下町MBA」はマスコミでも注目を集めた。現在はパソコンスクール(有)PCビレッジの代表を務めながら、地域活性化のため尽力している。



#### ■玉川雄司氏 NPO法人 京都シルバーリング 代表理事

1925(大正14)年京都生まれ。1985年、特定医療法人総合病院京都市南病院を退職。1987年5月、京都シルバーリング設立。20年もの間福祉現場で活動を続け、高齢社会を生きるうえで大切な心構えを提言したり、日本のボランティア活動の課題解決に取り組んでいる。現在は京都シルバーリング代表理事のほか、社会福祉法人健光園理事長、社団法人京都ボランティア協会常務理事、きょうとNPOセンター常務理事を務める。「高齢者でもできる」ではなく、「高齢者だからできる」にこだわって仕事作りを奔走。毛筆の仕事、特に企業の年賀状の宛名書きや賞状、卒業証書を代筆する筆耕業務の他、「生涯学習と観光」という切り口で、京都の伝統的な衣食住などの文化に実際に触れて学んでもらう「京都講座」という旅行の企画も展開。シルバーリングはそのツアーのコーディネーターやガイドを担い好評を得ている。著書に『新時代が求める医療人の心構え50』『老いを生きる(共著)』『遠くない定年、近くない老後(共著)』など。



#### ■長野ヒデ子氏 絵本作家

1941(昭和16)年愛媛県今治市に生まれ、美しい瀬戸内海を見て育つ。1978年『とうさんかあさん』が第1回日本の絵本賞で文部大臣奨励賞を受賞。以来、絵本や挿絵、紙芝居などで創作活動を続ける。絵本作品は『おかあさんがおかあさんになった日』(サンケイ児童出版文化賞受賞)『せとうちたいこさんデパートいきタイ』(日本絵本賞)『海をかえて』『狐』『おとうさんがおとうさんになった日』『いのちは見えるよ』など多数。また、挿絵、紙芝居作品も多数。パステル、筆、色鉛筆等作品によりさまざまな画法を用いた作風。日常の何気ない生活を新鮮な感覚でとらえたユニークで楽しい作品が多くの子供達に親しまれている。2002年初エッセイ集『ふしぎとうれしい』を出版。鎌倉市在住。

## Panel Discussion

# パネルディスカッション



**【司会】** みなさま大変お待たせいたしました。只今より、パネルディスカッションを開始いたします。本日は「光る年の重ね方を求めて」～達人が語る大いなる夢～というテーマに基づき、自らの生き方を切り開き、そして培われた知と技を生かして、それぞれの地域でご活躍中の方々をお招きいたしております。それではさっそくご登場願ひましょう。

まずは、「コンピューターおばあちゃんの会 代表、大川加世子様」、続きまして「株式会社ジーバ 代表取締役社長、北川安洋様」、「NPO法人早稲田創業支援機構 代表、早稲田大学周辺商店連合会事務局長、桜井一郎様」、「NPO法人京都シルバーリング 代表理事、玉川雄司様」、「絵本作家、長野ヒデ子様」、そして、最後にコーディネーター役を務めて頂きます、「経済評論家で竹内経済工房主宰の竹内宏様」です。よろしくお願いいたします。

では、ここからは竹内様に進行をお願いしたいと思います。私はアシスタントでお手伝い申し上げますのでどうぞよろしくお願いいたします。

**【竹内】** 竹内でございます。これからパネルディスカッションを始めさせていただきますと思います。先程か



いろいろな議論がございましたように、まもなく、10年ぐらいで人口の四分の一が老人になるわけがございます。さらに、20年経ってみますと、老人の数が1700万人増えて、若い人の数が1300～1500万人に減りますから、私のようにぼやぼやしているのが増えて、がん働く人が居なくなりますから、数学的な確かさで経済はよたるということになるわけがございます。ですから、我々が相当頑張らなくてはならないということでもあります。

先程、養老さんが言われましたように、我々の年代というのは、「愛国から民主」と言われましたけど、どうも今までは大家族で団結して生活してきた。民主主義になりますと大家族こそ封建的である、これをばらばらにすることこそ正しいのだ、ということで丸山昌夫先生をはじめ、その言うことをききまして、努力をしてばらばらな所帯を作ったのでございます。つまり大家族から離れた。離れて老人になってみたら、まったくばらばらになってしまって、特に大都会では砂のような社会にいて、老人だらけになって、経済がよたるわけですから、どうしたらいいか、ということが我々に課せられた非常に大きな問題だと思うわけでございます。

幸いに老人の力弱さをカバーしてくれるのがパソコンでありますけれども、我々は上手く使えないということでありまして、ここでも非常に難点があるわけがございます。若い人と一緒に居ればパソコンでも携帯でもすぐ覚えちゃうんですが、年寄り夫婦や年寄りだけで居たら、到底覚えられないんで、あっという間に消えちゃって、電話しても繋がらないし、教えて貰う人がいない。というような寂しい社会にいたるわけがございます。このままでいきますと寂しさが募っていくはずですが、今日ここにいらっしゃっている5人のみなさんは、たいへんすばらしい活躍をされているわけがございます。この5人の先生方の内容を聞きますと、我々の将来の生き方も分かりますし、将来の老人社会の素晴らしさが浮いて見えるような感じがいたしますので、早速、パネルの先生方に最初に自己紹介をお願いしたいと思います。

**【大川】**「コンピューターおばあちゃんの会」の代表をしております大川と申します。このかわいらしい名前



は今から30年ぐらい前になりますでしょうか、NHKのみんなのうたの中に出てくるアニメの題名なんです。明治生まれの白髪頭を後ろにきゅっと引き詰め、着物を着て、丁度いじわる婆さんみたいなお婆ちゃんがすることといたら最先端のパソコンをたたきまるといったギャップが楽しく、アニメが可愛らしかったので、印象深く覚えておりました。そして20年後、このお婆ちゃんが実現いたしました。

8年前、まさに高齢化社会に突入いたしまして、これからは誰でも自立して生きて行かなくてはとひしひしと感じた頃で、この自立をパソコンが助けてくれる時代が必ず来ると思いました。でも世の中、まだ高齢者とパソコンを結びつけてくれる人は誰も居りませんでした。どこに相談に行っても、まったく相手にされませんでした。そんなわけでしかたなく驚く、いいえ、あきれ世間をしり目にこの会は発会いたしまして今年で8年目に入りました。

シニアとパソコンとを結びつけた草分けと言われました。仕事の効率を上げるためだけのものと考えられてきたパソコンを最期まで元気に生きるため、仲間意識を拓げるため、というもうひとつの大きな役目を見つけたと思っております。

「パソコンで遊ぼう」という呼びかけがまだとても新鮮だったころのことでした。それから今日までの間も涙、語るも涙の、いや翔んでるジジババちゃまたちの生き生きした毎日をこれから話させていただきます。

**【北川】**「株式会社ジーバ」の社長の北川でございます。介護用品を主に製造しているんですが、我々が定



年を迎えた後、やり残したことをやろうじゃないかと始めた会社でございまして、社名の如く、爺さんと婆さんの集合体で非常に楽しくやっていますが仕事が思ったようにうまくいかないものですから、だんだん離れていく人が増えて、何故かというジーバを創立した当時の約束として、5年後は株式を公開してそのキャピタルゲインで遊びまわろうじゃないかということで、本来ならば今頃エーゲ海で優雅にクルージングをしているところですが、どこが食い違ったのかそうはいかなくて、苦戦しているところでございます。

苦戦しているところはどこか、後ほどお話ししたいと思います。

**【桜井】** 私は幼少の頃から早稲田の街に住んでおります。20年ほど前、早稲田大学が創立100周年を迎えた時に大学の周辺に7つほどの商店街が大学を取り囲むようにあったのですが、その商店街がひとつの任意団体を作ろうということになりまして早稲田大学周辺商店連合会というものを編成しました。その事務局長をやっております。

私が学生の頃は昭和40年代前半から半ばなんです。早稲田といえば、地方からの学生が7割りぐらいでした。大学の周辺は麻雀屋さん、居酒屋、喫茶店といったものがありまして、学生が大学の周辺で溢れておりました。24時間学生は大学の周辺で過ごしておりまして、何にもすることがなくなると大学の授業に出るという状況で、大学の周辺は常に学生で賑わっておりました。それが昭和50年代半ばになってきて、東京、埼玉、神奈川、千葉の1都3県の学生が7割りを占める

という逆転現象が起きてました。早稲田の学生街も、学生達は子供の頃から新宿も渋谷も六本木も知っているということで田舎町のような早稲田には用事がないと、早稲田ではあまり過ごさないという状態が続いてきました。

そんな時にアメリカの大学街を視察するという話があり、ロサンゼルスにありますUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)を視察する機会があったんです。当時UCLAは学生数3万7千人でした。早稲田は4万人。それに対してUCLAの社会人学生、ようするにエクステンションですね、1989年ですから今から15年ぐらい前なんです、すでに15万人いまして、20歳～80歳くらいの方が賑やかに学生生活を送っていました。それに対して早稲田の発足したばかりのオープンカレッジに通っている社会人の方は8千人ぐらいしかいませんでした。

私は帰国して、早稲田の街はこれからは高齢者の元気な方がたくさん集うような街になっていく、そういう方向に私自身も関わっていかなくてはと思っておりました。そんな中で高齢化社会の勉強会を開いたり、社会人サークル活動を展開したり、パソコンスクールを立ち上げたり、最近では中高年の起業、創業の支援活動をしております。後ほど紹介したいと思います。

**【玉川】** 玉川でございます。京都から参りました。私は学生の時に東京に居りまして、理科系でした。研究所に勤めさせていただいたあと、途中で結核になりまして、京都に帰りました。お世話になった先生方のお手伝いで一番イヤな、ソロバンとか簿記とかやったことのない仕事で定年までいやいや勤めたようなことで、ソロバン三回やったら三回とも間違うという人間でございました。そのコンプレックスから昭和36年にコボルを勉強しましてコンピューターに関わりまして、高齢化の中で珍しいなと仲間ができました。

さて、全国にシニアの人材センターなんていうのがお役所の周辺にございますが、「年寄りでも出来る仕事」とおっしゃるんですね。大体ね、70になったらたいがいのことね・・・、ちょっと若い人には出来ませんよ、だいたい博士クラスか、教授クラスの仕事出来る人



ばかりが年寄りだと思ってるんです。「年寄りでも出来る仕事」じゃなくて、「年寄りでない出来ない仕事」をやるような分野を開発しようかという仲間が偶然集まりまして、やってみました。

それが立ち上がったのが今から18年前でしたが、年寄りにはリーダーなんていらんのですよ。みんながリーダーみたいな人ばかりですから、お互いにそういう人がコーディネートする術をお持ちの方、会社と人間とのコーディネートが上手な方、人と人、企業と企業が上手な方いろんなタイプの方が居りまして、そして年とった方は結構勝手ですから、人の縛りが効くような人はそうたくさんおりませんで、今200人を少し割っておりますが。毛筆の達人な人が居るんです。これは見事なもので、京都の府立大学、国立工芸繊維大学を筆頭に幼稚園までの卒業証書や卒園証書は京都全市の何割かは私たち「京都シルバーリング」の毛筆グループの人たちがやっております。

発足した頃、ありがたいことに京都は繊維の街でしたんで呉服屋さんの案内状、見本市の封筒を書く仕事などがたくさんございまして、一番多いときは12～13人で年間800万を越す受注をお持ちでした。最近パソコンでの宛名書きが増え、不況の影響も受けております。

また、お年寄りには歴史の好きな方が多くいまして、京都1200年の歴史をいろんな形でガイドしてあげようという人がおられます。この方々の手で京都講座というのが始まりました。だいたい全国何処に行っても京都の匂いがあるとおっしゃいます。やっぱり1200年、日本の中心の都市でしたのでそういうものがたく

さんあることは、みなさん体験の中からご存じで、観光バスみたいなガイドはイヤだ。十人十色で京都をガイドしようと、パターン化した案内ではダメだという主旨でやっておられるんで、みなさんの「我」が生きてないと年寄りの価値がございませんから、そういうのも含めて「京都シルバーリング」というのは動いていて、Eメールより“絵メール”がいいと絵手紙をお書きになる先生がいたりいろんな方がおられます。

私も定年になってボランティアでもするかとやりました。ボランティアの話で今日は呼ばれました。実は、父が12年寝て死にましたが、寝たきりの父をお風呂に入れる苦勞を体験しました。その体験を何とかお役に立てないかなと思いましたが、私のボランティア体験の入門でした。後で少しずつ体験をご披露させて頂きたいと思えます。



**【長野】**長野でございます。よろしくお願ひいたします。子供の絵本とか紙芝居とかを書いております。

生まれは愛媛県の今治市で瀬戸内海の海の側で育ったんです。それが縁ということではないですが、鯛が主人公になった絵本「せとうちたいこさん」とか、いろんな絵本を書いておりますけれど、絵本を書くことで自分が鯛になったり、熊になったり、もちろんおじいさんになったり、おばあさんになったりしながら作品を書いていったんですが、このたびシニアというので呼んでいただいて、あらためて私はおばあさんなんだなあと自覚いたしました。

今日はおばあさんとして、初めてそういう気持ちになった、ドキドキを話していきたいなと思えます。

【竹内】 ありがとうございます。さて、私は昔、銀行に居りまして、50年間調査の仕事をやってきました。ついてないといいますが、前の銀行は潰れちゃいまして、その後勤めていた研究所も潰れまして、長銀が潰れて残念だということ「長銀の無念」という題で中央公論に書いておりましたら、その最中に中央公論も潰れまして、それから今年、私の故郷の清水市が合併して消えまして、どうも世の中ってものはこういうもんかなって、73歳になって初めて人生がよく分かったという感じがしております。

経済の本を毎年一冊ずつ書くようにして、能力がありませんから趣味はひとつであります。スキーであります。スキーだけではだめですから「スキーの経済学」なんて本を書いて、足よりも口スキーで食っているという感じです。もうひとつ故郷が大事ですから、故郷の英雄、清水次郎長を偲ぶ会の会長でありますし、静岡総合研究会の理事長をやりましたし、最期に行くところは故郷かなという感じであります。

## ■論点(1) 活動の考え方、基本姿勢

では、早速ですけれど5人のみなさんがどういう活躍をされたか、次にその中で出てきた問題点は何か、3番目には将来はどうされるおつもりか、この3点についてお伺いしたいと思います。最初にまず第一点、なぜそのような活躍をされたかということにつきまして、順次お願いしたいと思います。

【大川】 先程も申し上げたのですが、高齢者同士でパソコンを覚えられるサロンのような場所が必要と思ひ、発会をしたものの、80歳代、90歳代で初めてパソコンに触る方にパソコンを伝えていくという、世の中で初めてのことをするので誰か聞く人もいないし、マニュアルもありませんでした。

どこから、何を、どうやって始めたらいいのか途方に暮れて、「コロッケ勉強法」というのを始めました。

まず一番最初においしいものを食べさせてしまう。そして「わあ、おいしい、これどうやって作ったの」と聞かれたら、「これはジャガイモの皮を剥いてね・・・」と始

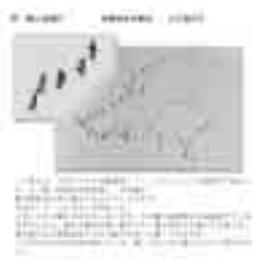
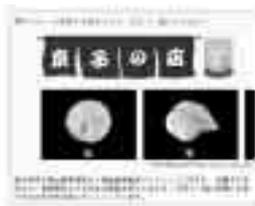
めればよい。誰でも好きなことから入っていこう、これしかない。理論や基礎は後回し、そして操作を間違ってしまったら、その時は全部機械のせいにしてしましましょう。「こんな複雑なもんを作る方が悪いのよねえ」といったようなものでした。今はおかげさまで本当に使いよくなりましたが、8年前はまだまだパソコン、本当にややこしかったです。

でも交流が第一、会話をしましよ。メールを一本指でゆっくりと、「こんばんは」の5文字を送りましたら、「さむいね」の4文字が返ってきた時の嬉しさといったらありませんよ。後は字数が増えるだけです。会話は高齢者にとりましては生きるための酸素、栄養素、孤立・孤独が一番困ります。ひとりではない仲間が居る、これで元気になります。これから老いていく自分のためにしゃべり場を作っておきましょう。生きがいになるもの、夢中になれるものを見つけておきましょう。

今私どもの会のおしゃべり広場では、日本中から一日に多い日には100通を越える若々しいメールが飛び交っております。北海道の北のはずれの会員からは、「今日流水が着岸しました」と写真が皆様のパソコンに届けられます。同じ日に沖縄宮古島から、「もう春」と満開の桜の写真とかクジラの勇姿が送られて来ますとちょっと贅沢な気分になります。基本は仲間意識です。高齢になりますとどなたも何かしら重い荷物を抱えていらっしゃる。メールでの心の癒しあいが元気で生きていく何よりの支えとなっております。

ここで、私どものおしゃべり広場でどんなメール交換をやっているかをご披露しようと思ひます。

これは動画を加工してスクロールさせ録音した音をかぶせたアイデア作品です。(列車の音が会場に流れる)次は冬、寒い井の頭公園で鴨だけが元気だったという写真です。(鴨のイラストが動いている)次は国外の会員達のために作ったのですが、吊し籠、会員のひとりが手作りで作ったきれいな日本のお雛様のひとつです。これは沖縄の会員が海に潜って、亀の髑髏を撮ってきて、また碧い海も撮って、いつまでもこの地球が碧い水をたたえていて欲しいという願いで作ったスライドショーです。これは85歳の方がヤブーで老人ホームを検索し、自分に必要な情報を手に



入れた経過や感想などを書いたものです。それからフリーのお絵かきのソフトをみんなで取り込んで、「さあ遊ぼう、さあ遊ぼう、フリーソフトでさあアート、みんなで画けば恐くない」と絵を描いて交換しているところです。次は百年後にオーロラを見に行きませんかと企画しました。私はシースルーだのロングドレスを着ていくのだと大騒ぎです。これは和菓子の好きな会員が、お菓子屋さんに行って見つけてはお茶の時間とって毎日のようにおいしい和菓子を載せてくれます。これは候文のメールというのは珍しいと思いますが、候文で書かれたメールには候文で返事が来ます。それから梅談義、こうなりますと世界中からの会員がジャムだ梅干しだジュースだと騒いでおります。これは長崎の佐世保の空を飛ぶ鶴の北帰行です。その真下に住んでいる方がいつも送って下さる鶴の渡りの写真です。癌になり、回復され今年が喜寿のお祝いをジンバブエでしてきたよというメールも載りました。これは先程申し上げた流氷の写真です。これは88歳のおばあちゃまが曾孫さんに童話を創って、絵を描いて、お話を聞かせているところです。

このように毎日毎日楽しいメールの交換でおそらく孤独感からはだいぶ癒されていると思います。まだありますが、次の機会にお見せします。

**【同会】** ありがとうございます。

**【竹内】** 北川さん、お願いします。

**【北川】** 今から仕事をされようと思われる方もおられると思いますけれど、仕事をするとしたら、根っからの

仕事好きでないとダメだと思いますね。例えば、あの切削油の臭い、プラスチックを加工するときの臭い、木材を切るときの臭い、こういう臭いをどんな高級な香水よりも懐かしいと感じられるぐらい仕事が好きじゃないとやっても無理じゃないかと思います。

私のきっかけは社長を次の世代に譲りまして、仕事が無くなって、仕事好きの人間に仕事が無くなるというのは非常に残酷なことをごさいます、そのためにどうしようかとしているとき、ちょうど異業種交流会を佐賀県でやっております、このメンバーがやはり定年になったら仕事を辞めるとか、あるいは高齢になって仕事を次に譲るといった人が増えてきて、この人たちと一緒にやれば、自分の知らない分野を、それぞれの持っている経営資源を組み合わせたら、新しいものができるんじゃないかと思いました。

本当に、智恵とか知識とか経験とか情報、人脈、信用など全部持っている人たちの集まりですから、すごい能力があるわけです。我も我もと参加させてくれという人がいましたが、60歳以下は未成年だから60歳になってから参加しなさいと制限するほどでした。

もうひとつ仕事をしなくてはいけない理由として、女が強いと言いますが、女房が一番強いと思います。結局見ますと、お茶、お華、絵を描くとか、書道をするとか商工会議所の婦人部とか、ひと月の70%ぐらいは外に出なくてはならない。それだけ活動しているのに私が家に居ると食事だとか面倒見るのに、自由に出られない。せっきやくやっているのに自由に出ていくためには私が家に居なければいい。そんなことをごさいます。

それと健康維持のためにも必要だと思うんです。定年になって仕事を辞めると読み書きソロバンから外れるから、呆けが早いと思うんです。私の知り合いの中に、長年女房に迷惑をかけたから、旅行でもして半年から一年ぐらい充電期間にしたいと言っていたが、私はそれは充電ではなく、放電だということです。家庭に居たら孫と本気で喧嘩するようになってしまうんです。そして不規則な生活に流れてしまう、放電が続くと停電になってしまうよという話をするんです。そういうことから、我々は呆け防止、健康維持のためにも、そして若さを保つために自分が打ち込める仕事を

しなくてはいかんということがきっかけでございます。

**【竹内】** ありがとうございます。それでは、桜井さんをお願いします。

**【桜井】** 私は昭和22年生まれの所謂団塊の世代です。学生一辺倒の街から社会人も集う、特に中高年の方が集うような学生街づくりを目指したいということでここ10年ほど活動してまいりました。その中で、団塊の高齢化社会勉強会を開こうと1992年に思いついて、呼びかけを始めたのですが、たったひとりでやったことで仲間がいたわけではありません。

私の世代も先輩達の世代と同じように仕事中毒人間で、ほとんど地域社会とかに関わりのない人間がたくさんおりました。こういった人間が定年で会社を離れていった時には、団塊の世代は日本のお荷物になるんじゃないかと、50ぐらいの現役の頃から会社という一足のわらじだけではなく、地域とか社会貢献とか二足、三足のわらじを履くような形で、考えを変えていく必要があると考え、団塊の高齢化社会勉強会を早稲田の街に開きました。(映像を見ながら)



学生街はこんなところですよ。桜も咲いております。当時、パイオニアが日本で初めて大々的なリストラを始めたんですが、その時はマスコミも含めて非難轟々になったのです。そんなことで音響機器の会社のパイオニアはリストラでもパイオニアだったのです。このリストラが始まったときに勉強会を開いて、それが大学の協力も得られ、1999年には、国連の定めた国際

高齢者年がありまして、このときに大隈講堂も含めて大学の構内を借りて「エイジングメッセ早稲田」というイベントを開きました。高齢者社会の生き方をみんな考え、議論し合おうと約1万人の方が集まって4日間開いたわけです。こういったことが発展して、社会人のサークル活動、中高年のための創業・起業支援活動といったことに繋がってきています。この支援活動をするのは何故かという、早稲田の街も空き店舗が増えたのと団塊の世代がリストラされるようになって、次に何をするかといったときに、定年のないような起業を50代ぐらいから始めていけば70代、80代まで定年のない仕事を元気でやっていけるのではないかと考え、始めました。

中高年からの起業が日本の元気を作り出すということで早稲田で最近オープンしたお店を回ったり、創業した人の体験話を聞いたりして、早稲田の街を中高年の起業で賑わそうとつとめています。早稲田のまちの空き店舗情報提供とか補償金の引き下げ交渉、内外装業者の紹介、印刷物の制作のコンサルタント等々いろんなことをやっております。この中ですでに早稲田で起業した方が4、5人出てきていますので、後ほど紹介したいと思います。

**【竹内】** どうもありがとうございました。それでは玉川さんお願いいたします。

**【玉川】** 実はシルバーリングを立ち上げる前に、51の時に父が12年寝て死にまして、最初の3年と最期の3年は寝たきりでございました。風呂に入れるのに家族中がものすごくしんどい思いをしました。父が死にまして、定年になって何をやろうかなと考えつきませんでしたので、寝たきりの人に病院の風呂でも借りたら、事故が起こっても安全だから、寝たきりの人をお風呂に入れることをやろうかなと思ひまして、小学校の頃の幼なじみで花園大学の福祉の教授をしました友人に相談をかけてみました。

「お前なあ、61になってから担架担いだらギックリ腰になるのがオチだから、この機会に二人でやろうじゃないか」と尻をたたかれて、ボランティアの用意をしました。ところが、病院でお風呂に入れるためには自



動車で運ばないといけない、タンカを運ぶストレッチャーもいります。それで銀行に相談したんです。そしたら、「玉川さん、ボランティアというのは収益がないから、お金貸せませんわ」と言われた。収益がある仕事にお金を貸すのが銀行だから、貸せませんと。困ったな、「今にそういうこともせんらん時代も銀行にくるん違うか」と言いましたら、「玉川さん、定年の時の金を担保にしたらなんとか出せるようにしましょう」と、「しかし借入れの申込みは私が書かんとあんたが書いたら貸せる対象にならん」とそれで貸してくれました。ローンだったら2年というのを5年で貸してくれました。自動車ローンは2年間なんです、それでは返せませんので。

ストレッチャーを入れる車の改造は同級生の自動車工場がやってくれたり、いろんなことで病院に出入りしている馴染みの医療器械屋さんがストレッチャーをくれたり、でスタート出来そうだなと思いました。

私が今も関わっております老人ホームでみんなで体験実習をしました。さあ、やろうというときに体験した中のひとりが俺はどうも続かんと思うから、銀行返済ボランティアをやると。月1万円ずつ借りた分を返すというような、いろんなボランティアが揃いましてスタートしました。丁度私が53のときでした。今25年になります。

とっても喜ばれたんですが、ある時にお風呂に入れて出てきましたらご本人は手を合わせて喜んでおられるんですが、家族の人がとても冷たい態度で、「ああ、あの人ら市役所から金でも貰ってやってんだらう」

という態度だったんです。帰りの自動車の中で一緒にボランティアの人がこういうところもあるな、嫌な思いもしましたと車の後ろでされてました。そしたら、もうひとりのご婦人が「お風呂に入った人さえ喜んでくれたら、家族はどうでもいいやないの」言うんですね。「私たちは勝手にやっているんだから、喜んで貰える人さえいればそれでいいんだ」と。あ、なるほど勝手とは、イイ話だなと思いました。そしたら北海道で勝手連という選挙の応援した人がパッと消えてった話がございました。ボランティア選挙応援隊ですか、こういう発想が本当にボランティアなんだというのは、後ろの話を聞いてましてものすごく気持ちよかった記憶がございます。

そんなんでやってましたら、お風呂に入れる施設が私の友人の早川さん、呆けの話をしている医者なんですが、この人が本の印税で市の施設へ浴槽を寄付しました。そこも使ってやりましたら、市役所が「あの車がいいからあんなんを買おう」とやったら、NHKか何処かから自動車の寄付がありました。ああ、こういうことが広がっていくんだなということで、25年前日本にはあんまりボランティアがございませんでしたら、いい体験をさせていただきました。しかし市役所が動きまして、続いて社協（社会福祉協議会）が動き出したので私はそれでやめました。行政が、税金を受けている側が立ち上がってくれたんならそれでいいと思って、うち切りました。その車は病院の人たちがその後も入浴サービスのボランティアとして動きました。これが私のボランティアの入門のチャンスでございました。

いいことしているなんて思っちゃいかんと、善意でやっているのではなく、いいか、悪いか判断してくれるのは、受けてる側です。勝手に善意でやってるとか、親切だとか、役に立ってるとか、そういう思い上がりはせんほうがいいということを学ばしてくれたのも、車の後ろに乗っておられたご婦人の会話でした。本当にいい勉強をさせてもらった25年でした。

こんな経過を経てその後のシルバーリングの立ち上げに繋がっていったんだと思っています。これが私の老後25年の歴史でございます。



**【竹内】** どうもありがとうございます。  
それでは長野さんお願いします。

**【長野】** 私は子供の頃から落ちこぼれで、学校にランドセルを忘れて帰るなんてしょっちゅうで、物忘れはいいし、洋服もあちこち落としてくるし、子供の頃から老化現象が始まったのか知りませんが、また、病気で学校にも行けず家で療養生活をしたということもありまして、何かをすることの意味を諦めざるを得なくて、「感じる」ということの自由さを子供の時に身につけたような気がするんです。

転勤族でいろんなところに引越をしました。私の子供の頃は絵本というのがほとんどなくて、本当に小さな村に生まれ、本屋さんが一軒もなく、絵本を買って貰うということはほとんどあり得なくて、たまに祖父の家に行くと町の軒の本屋さんで帰るときに一冊本を買って貰ったという子供の頃でした。ですから大きくなって岩波の本とか、福音館の本とかいろんな出版社の本が出るととっても嬉しくて買い溜めていたんです。そうすると、転勤して知らない町に行っても、家に本があるから近所の子供が遊びに来てくれるんです

ね。引っ越しして、知らない町に行くと最初にのぞきに來るのが子供で、一緒に遊べる子供がいるかな、おばさんは優しいかなとか、まずチェックに來るのは子供なんです。その子供と絵本とかがあるとすぐ友達になれるんです。持ってた本のおかげで知らない町に行っても知らない人や子供たちと友達になれたという経験が文庫を開くきっかけになっていたんだと思います。

そしてなんとなく絵本を描いてみたりしたんですが、それがたまたま賞を貰ったりしたことで編集者が私にお仕事をくださったのがきっかけで本が出るようになったんです。いい編集者に会ったおかげで自分が気が付いてなかった世界を教えてくれた、一冊の本がまた次の本へと繋がっていったんです。

今西祐行先生という方がいらっしゃって、国語の教科書で「たろうこおろぎ」とか「ひとつのはな」をお書きになり、子供たちと農業小学校というのをやっていました。先生と絵本を創るのに私も農業小学校に通ったんですが、それまでものを作るとするのは自分の力で作ると思っていたんです。ところが農業小学校で、種を撒き、それが育っていくのを見ますと、何か大きなものの力を貰って育っていくような気がしてくるのです。それまで天気予報を新聞やテレビで見ましたが、農業小学校の方の空を見ながら、自分の感覚で確かめたいという気持ちが大きくなっていったんです。

そうして農業小学校に通っているうちに、目に見えるものより、見えないものを感じることのほうが大事だなというのを教えて貰って、自分がどういうものを感じることが出来るのか、目に見えないことを探り当てられるか、創作に繋がることが生まれるのかなとわくわくして、いろんな苦しみもあるけれど、自分探しのような感覚でやっています。

創作というのは自分の全てが出てしまうので、恥ずかしいと思うのですがそれをさらけ出すことによって自分自身を知る、知りたいなということで描いています。また、読者からもいろんなことを教えて貰っています。

**【竹内】** ありがとうございます。つぎに現在の活動の問題点について、大川さんからお願いしたいんですが、その際に恐縮ですが、例えば大川さんのところだとシニアネットにどうしたら入れるのかな、どうしたらアクセスされるのかな、例えば北川さんのところは売上高はどれくらいで、どういうものをお作りになっているところだろうとか、桜井さんと玉川さんには、NPO法人だと何人くらいで、売上げはいかがか、とか内容が平たい言葉で、一言でいうとなにかということを出だして現在の問題点をご説明されながら、ついでに触れていただければと思うわけでございます。ではお願いいたします。

**【大川】** 問題点ですか。これは初めてやったことなので、克服法も未経験のものでした、でもありがたいことに会員の皆様は人生の達人であるし、戦争をはさんで波瀾万丈の人生を乗り越えてきた人たちがばかりなので、智恵もありますし、他人の痛みもわかります。この歳になりますと友人も減る一方で対人関係を大事にしていこうとみなさんが思ってくださいるのが大きな助けで、これが若い人のグループと違うところのような気がします。

孤独にはなるまい、仲間意識を大事にしようとみんなが思って、メールの中身も人を傷つけないようにしようとか、言葉を注意してらっしゃるし、「ありがとう」という言葉が、一日なんべんも飛び交っております。交際術のお手本のようなメーリングリストになっています。経験という引き出しをフルに活かしまして時間たっぷりの時間貴族たち。私はそう呼んでいます。この方たちはパソコンを覚え、応用編に入ったその時から実力を発揮します。達人達はどんなことをしているか見ていただきたいと思います。(スクリーンを見ながら)

例えば、筆や絵の具もいらないマウスだけでこれは画かれているんですが、洗ったばかりのブドウから水が滴って、下の新聞紙が透けて見える様子まで書いてらっしゃる。加工などもすばらしく、歌舞伎座、ザクロ、林檎の花咲く頃、それから音楽などもすばらしくて、パソコンで作曲をしたり、編曲をしたり、とても味のあるものを作られます。これも潮騒の音を入れながら、

パソコンだけで作曲してらっしゃいます。(音楽が流れる)これはパソコンに伴奏させながら自分でお琴を弾いたのを入れたものです。ヨーロッパでは高齢者の方をワインの味と言うんだそうですが、すべてが熟成されているという感じがいたします。俳句や写真などとても見事なものなのでどうぞみなさまお時間のあるとき、ジジババドットコムというホームページにお遊びにお出かけください。(www.jijibaba.com)

【北川】 問題点は売れないということです。なぜ売れないかということ。それは、商品としてはこれの右に出るものはないという自信作ですが、実際に使っている人に言わせれば、地獄に仏と喜ばれ、在宅介護にこれがないと、とても生活出来ないと言われる。小学4年生の女の子が高校2年生の寝たきりのお兄ちゃんをすべて介護して、両親が外に働きに出られるようになったとか、50歳位の車椅子のご婦人が80歳のお父さんを車椅子に乗りながら、入浴、排便などの介護をすべて出来るという機械なんです「てがる」というのは。ある人はこんなすばらしい機械に「てがる」なんて失礼な名前を付けるなんて機械に対して悪いと言われるほど、使っている人には好評なんです。もうひ



てがる



あわゆき

とつ作っている商品に、「あわゆき」という室内トイレがあります。これは便槽に泡が充満していて、音もなし、臭いもなしというすばらしいトイレなんです。これもあまり売れない。というのは、業者が設置する、取扱を説明しなければならぬので面倒だとやろうとしない。看護婦やヘルパーさんは仕事の手順が変わることを嫌うので、そういうことが売れない原因だと思えます。例えばスーパーに泳いでいる鯛や鰯があってもおそらく売れないでしょう。今は、刺身にしたり、切り身になってないと売れないという簡便な時代ですから、今後みなさん方がものを作られるというときはそのへんを考えた商品づくりを始めないといけません。また、売り方なんです。何処に売るかということがはっきりしないと、今まさにそれを探しているところでございます。通信販売で売るとか、大きな組織を使うとかで苦労してます。

シルバーベンチャーと若い人のベンチャーとどう違うかということ、シルバーベンチャーは1でスタートして10でゴールとすれば、7か8まで経験済みなんです。社員教育することもなく、技術を学ぶこともなく、あと2か3をクリアすればゴールできます。若い人のほうはそうはいかない。1から10まで一つ一つクリアしなければならない。ベンチャーはハイリスク・ハイリターンといますがシルバーベンチャーはローリスク・ハイリターンで全て心得ているからハイスピードでいく。そういう売れるものづくりをすればこれくらい早く成功する仕事はないのではないかと思っている次第です。

【竹内】 北川さんのところで一番のお年寄りは何歳の方ですか。

【北川】 72歳です。

【竹内】 開発もお年寄りの方がおやりになっている。

【北川】 そうです。もうみんなそうです。

【竹内】 そうですか。はい、ありがとうございます。では、桜井さんお願いします。

【桜井】 サラリーマンが定年になってハッピーリタイア

という考えもいいのですが、元気にいつまでも働くというほうが、どうも日本の社会には適しているのではないのでしょうか。その中で、空き店舗が目立ち始めた早稲田の商店街でその店舗を使っていたら、(スクリーンを見ながら)起業支援活動を始めた訳です。

目的は早稲田の街で起業を町ぐるみで支援すること。理事会の組織構成は早稲田大学の教授や商店会の会長達がメンバーになっております。勉強会を開いたり、事業計画書の書き方を学習したり、実際にお店で研修を受けたりしています。今までは集団の中で力を発揮していたけれど、今度は地域の中でひとりからでもできるところで、もう一度汗をかくことによって、新しい元気な社会を作っていたらと考えております。

この方は52歳で大手商社を早期定年退職を選んで、2年前に創業した「三つのオレンジへの恋」という卵料理専門のお店を開業しました。彼は会社で窓際扱いされてきた、定年までまだ9年もある。それを家族を養うために必死にしがみついているんじゃ、自分が定年を迎えたときには自分の精神はズタズタになってしまう。それならば蛮勇を奮って、経験もないけれど、自分が憧れていた一国一城の主である飲食店を開店してみたい。プロコイェフというロシアの作曲家の三つのオレンジへの恋という歌曲があるんだそうですが、それをお店の名前にして、卵料理専門のレストランを開き、2年目になっています。このお店を開いた動機は何かというと、卵料理は女子学生が好きで、店に大勢来てくれるのではなからうかと、おじさんは若い女性に囲まれてやる気が出てくるといった彼らしい動機で、それを茶化したりしています。

この方は石油会社に59歳まで勤めていた方で、これからは資格の時代だ。早稲田に来ると学生が4万人も居る、その中に国家試験などを目指している学生がたくさん居る。早稲田の街に案内とか情報、パンフレットを一堂に会した情報ショップを開けば、学生はあちこち動き回らずに便利なんじゃないか。逆にセミナー会社などは不特定多数にパンフレットを配るよりは確実に考える、そういったニュービジネス的な考えで開店して2年半になっています。

早稲田の街では今こういった中高年の方の創業の



支援をしております。

**【竹内】** 桜井さんのところは収入はどうなっているんですか。

**【桜井】** 収入と申しますか、空いているお店に新宿区や、東京都が家賃を2年間助成するという仕組みがあるんです。

それを使ってお店を借り、2階は事務所として貸すスペースにしました。1階の方は、2カ月とか、3カ月とか短期に借りてやってみたい人に貸してチャレンジショップにしています。

**【竹内】** 例えば、僕がやってみたくいと言ったら。いくらぐらい出せばいいんですか。

**【桜井】** タダで使える仕組みを提供しています。

**【竹内】** そうですか。玉川さんどうぞ。

**【玉川】** NPO法人というのは文字通り読むと収益を上げない法人ということになっています。NPO法人を申請して認承されたら、これは法人格が認められますから助成金や制度融資の対象になると思っている人が多いのですが、ところが補助金とかそういうのは殆ど貰えません。税金の面で得かといったらこれも全然ダメです。市民の自主的な活動に対して日本の制度は整っておりません。私たちも、それは覚悟の上でやりましたんですが、NPO法人は電話は個人でなく法人の所有にできる程度の法人で、NPO法人は



「市民公益活動に法人格を“付与”する法案」として通りました。付与という言葉の通り役所が市民に「授け渡し」た形になっています。決して自主的に獲得したものではないんです。

私たちのところは、会費収入が年間で約180万、それから書道の収入の2割を事務費としていただいております。その他、事業の収益等で年間400万円余のお金がないと運営できない。今、主婦で時給800円、週5日間来ていただいている人件費が約150万円弱という経費が一番大きく、光熱費や家賃等必要です。もし毛筆の方の収益金800万円を入れてしまうと消費税がかかる時代が来ます。公益活動しているからいい法人格ができたという幻想は持てないと思っています。民法の社団とか財団とか役所の外郭団体がございましては、ちゃんと補助金が出てます。予算が下りてます。そういうところと同じように予算が下りますが、民間には予算が廻ってくるという幻想は持てはならない、持つべきではないと思いますが、ああいう民法法人もだめになっていくと思います。行政にお金が無くなりますともたなくなります。私たちも毛筆などは売上げとして計上しないで、事務経費としていただくという方法で税金を逃げる方法を考えないと苦しくなるでしょう。

ボランティア活動は20年ほど前は“無償の奉仕”と言われたんです。戦争中の奉仕という言葉が残ってこの言葉が出たんだと思うんですが、社会的に役立つかということと、社会的に喜ばれるかとは別に、行動を起こしたらそれが収入になる場合とならない場合があります。日本はそういった整ったものがございま

せんので、これから市民活動の中で作っていく時代だと思っています。ボランティアは決して「奉仕」ではございませんので、受けた側がありがとうという気持ちを持っていただけたら幸福なことでございます。

ぜひ申し上げたいのは、私がボランティアで使っていた車は借金で買いました。市にはNHKから寄付がいきます。個人でやってるボランティアにはそういう寄付はきません。日本はまだそういう国です。それから、社協なんかそういう事業をおやりになると自動車税は免税です。個人でボランティアをして自動車を使いますと自動車税を払わなくてはなりません。京都市役所には市民と行政の「パートナーシップ推進室」というのがありますが、税金払う側がまだ税金を払い、税金を受けてる側が免税になって、同じ公益事業をしているという矛盾があることを覚悟の上でやらないと市民の活動は伸びていかないと思っています。それでもやるというのが新しい市民社会を創る意気込みが必要でございます。税金を使っている方にはいろんな優遇があります、又、市民がそういうことをお願いする時は、“上申書”、向こうがお断りになることを“却下”、下に返すんです。こういう言葉にもまだ「お上と下々」の意識が残っておりますから、本当に民主的になるためにはこういうことを克服することが大事だと思っております。

**【竹内】** ありがとうございます。それでは、長野さんをお願いしたいんですが、この私の虎の巻には、多くのシニアの方に実践してもらえそうな課題や問題点を抽出し、解決方法を探っていきたいと書いてあるんですが、長野さんみたいなお仕事ですと真似しようがないですね。

どういった絵の楽しみ方をしますか、それから今治なんかで大活躍されているわけですね。

**【長野】** 今治タオルのポスター等のことですか？そんなことないですけど。私の場合、何か問題点があったときに、立ち向かうとか、克服するとか、そういった大変なことは出来るだけ逃げてしまいます。立ち向かうとかではなく、みんな受け入れてしまって、よれよれになって、ぼろぼろになる自分を、打ちのめされてい



る自分を確認するというか、見ている状態。そこから立ち上がろうとするといろんな人の絵本を読む。子供の本というのは大人の本以上に、難しいことを分かりやすく書いていて、楽しく、楽しいだけじゃなくて深いものがあるのが絵本だと思うんです。

絵本を創るということは誰にでも出来ないことかも知れませんが、絵本を楽しむことは誰にでも出来ることです。子供の時に読んだから今は卒業したというのではなく、歳をとればとったなりに絵でいろんなことを感じる事が出来、また発見がある、気持ちをいきいきさせてくれる。歳を重ねていろんな事を知っていることも大事だけれど、歳を重ねたからこそ全部捨てて、捨てることによって新しいものが入ってくる。子供の気持ちになる、子供というのは何も持っていないから、いろんなものを吸収できて、新しい、初々しい感性があるんだと思うんです。日常生活の中でちょっと変わった角度で見ると新鮮な感覚を見つけるというのは、今まで積み重ねてきたものも大事にしながらも、全部捨てて、もう一度見直すということが大事かなと。

何か問題にぶつかったときに、克服しようとするのではなく、自然な気持ちになって、素直な気持ちになるという方が大事なかと、私はそうなりたいなど。子供と繋がっていたいなど。お手本はみな子供にあるとそういう気がします。

### ■論点(3) 具体的な進め方と指針

**【竹内】** それでは、これから将来どうしていくのか、あるいはこうすれば新しいアイデア、新しい社会参加、新しい老人の生き方が出来るという提案もいただきたいと思うんですが。

大川さん、このネットをおやりになって、先程争いが無い、非常に品がいいネットが出来ているというお話でしたが、そういう品の良さというのはどうやるのか、変なことがいっぱい出てきて、口論になったりするのをどううまく解決されているのか。また、ネットのオフ会はおやりになっているんでしょうか、オフ会というのは重要だと思いますのでその点もお聞かせ願いたいと思います。

**【大川】** オフ会は1年に2度、といいますのは高齢になってきますとだんだんに行く場所が限られてしまいがちです。ちょっとは華やぐ時も欲しいし、みなさんとお顔も会わせたいということで一年に2回企画をして東京で開催しています。北海道から沖縄から楽しみにして集まってきてくださるんです。その時に、あらあ、あなた女だったのとか、あら男だったのといって笑うこともあります。

**【竹内】** ペンネームをお使いになっているんですか。

【大川】 自由です。ハンドルネームにしたい人はなさるでしょうし、本名を使いたい人は使うでしょうし、本当に細かい規則はないんです。そんなことは皆様ご存じで、釈迦に説法みたいなことは必要ないんです。

【竹内】 そうですか、それで方々に幾つぐらいありますかねシニアネットというのは。パソコンの出来る方は一生懸命やっていて、私事で恐縮ですが女房が川崎のネットに入っていて、この仕事だけで私が食事ができないといい迷惑をしてるのですが、そういうすっかりハマっちゃった人とハマらない人といいますね。やっぱりハマらない人はもうだめですかね。

【大川】 会話が好き、人間が好きだと大丈夫なんじゃないでしょうか。会員のご主人様には迷惑がかかっているのかも知れません。(笑)

【竹内】 これからは、どうされますか。

【大川】 江戸時代は若者が経済を作って、隠居が文化を創ったといわれますが、現在でも同じだと思うんですね、若者にはどんどん仕事をしてもらって、高齢者は文化を極めていけばいいと思います。

私たちは高齢者が全国にちらばっている会だからこそ出来ることをこれからやっていこうと思っております。今は、消えそうになっている各地のわらべ唄を肉声で保存して、ホームページで紹介していこうと思っています。子供たちに、孫たちに平和なプレゼントとして残したいと思います。

童謡とわらべ唄の違いは、わらべ唄には作曲者も作詞家もなく、お爺ちゃんにおんぶの背中で、お婆ちゃんのお膝の上で、方言を交えながら、口から口へ伝えられたものをいいます。この収集した唄は、NHKの国際放送などで世界各国に2度ほど放送されました。これを聞いていただきたいと思います。この地図は孫に書いてもらった日本地図です。ここに送っていただいたわらべ唄を貼り付けています。沖縄だけは最初だったので私が録音に行きました。(わらべ唄が流れる)

いくつもあるんですが、この「ばんがむり」というの

は宮古島の会員が、弟や妹を背負って歌っていた唄でいつも私の背中はおシッコでビショビショだったのよと唄ってくれました。秋田の会員に、「あなたの回りでわらべ唄を覚えている人を捜して歌ってもらってくださらない?」とお願いしたところ、「誰かいないかとさんざん探して、気が付けば私自身がお婆ちゃんだったので、私が歌えばいいのよね」と唄ってくれました。誰も自分のことはお爺ちゃんやお婆ちゃんと思っていないとみんなで笑いました。

これは青森です。これは岐阜。人間の声というのは非常にサイズが大きくなってしまって、今までは出来なかったのですが、昨年ぐらいから、圧縮の圧縮が出来るようになり、こういうふうにホームページに肉声で残しておけるようになりました。

【竹内】 どうもたいへんすばらしいものをありがとうございました。ついでに方言もやっていただきたいですね。

【大川】 物売り、金魚売りなどの声は文化庁でとってあるんだそうですが、わらべ唄は初めてのようです。

【竹内】 北川さん、介護機器を売られるのは年輩者ですと種類があんまり分からないし、お子さんに買ってもらうとしたら、使ったことがないから分からないという、難しい点がございますね。

【北川】 そうですね。やはり介護用品そのものを選んで



だことが間違いですよ。今2千何百万高齢者がいますね、その中の1%ぐらいがちょっと具合の悪い人、その中の1%ぐらいが寝たきりです。寝たきりになってしまいますと、病院とか施設に預ける。在宅で介護が出来ないから預けるんであって、そうなると介護の機械もいらぬのです。親不孝者が増えたのか、しょうがないのかということです。利用者が少ない。

しかし、徐々に認知されて、売上げも増えているんで、そう悲観したものではないのですが、思ったように売れないと面白くないということですね。思ったように売れるにはどうしたら良いかということが一番の問題です。

私これからやろうとしていることは、我々は販路を持っていない、販路があるところに売ればいいじゃないか、私が譲った会社が釣り具の会社なんです。釣り具では国内有数になって、国内はもとよりアメリカ、カナダなど全世界にだしています。そのような販路を持っているから、それに乗っける商品を作ればいいことであって、釣り具の開発には充分ノウハウがありますので可能だと思います。売りづらい商品はゆっくりやる、その間どう維持していくかということで、もっと売れる市場を狙って開発しています。そういう販路を持っているのになんで苦労しているか、そんなことにやっと気付くというのが、高齢者じゃないでしょうかね。

私は開発が好きですから、開発をやっていればどんな苦しいことでも楽しいんです。いわゆる登山家がそこに山があるから登るというのは、やはり登頂するという希望と夢があるから、それともの開発は一緒にございまして、楽をして開発できるものはないんです。みんな苦労して、苦闘の中から生まれるんで、やはりそれを解決したときの喜びというのが何ものにも代え難いものでございます。その楽しみのために仕事をやっているようなものです。

楽に儲かる、楽に完成できるということはないと思います。その苦しみを乗り越えるところを仕事じゃないか、人生じゃないかと思うんです。あまりものを知りすぎると手をつけられないんです。会社を作ろうとしてもその業界のことを知りすぎると恐くなってしまふんです。知らないで飛び込まないと飛び込めない。知らなくてもやってみれば何とかなるもので、私はそれぐ

らいの覚悟でないととてもでない新しい仕事はとてもできないと思います。

やはり種を撒かないと芽もでないし、花も咲かないし、実もならない。とにかくスタートすることです。

**【竹内】** 桜井さん、お願いします。

**【桜井】** 私の本業は早稲田大学オープンカレッジという社会人向けの講座がありまして、その中でパソコンスクールを運営しております。

このパソコンスクールも5年前に始めたんですが、その前に早稲田の街づくり活動の一環として、私が呼びかけて社会人のサークル活動をしていました。路地裏研究会とか、年金を考える会、冠婚葬祭を考える会とかを200人ぐらい集まってやっていたのですが、その一つでインターネット研究会というサークルを運営していました。しかし、まだインターネットが普及してなくて、中高年の人にはなかなか覚えることが出来なく、つまづく人がたくさん居ました。それでは自分たちでパソコンスクールを作っちゃおうと資金も集まってスクールを立ち上げ、運営しています。(スクリーンを見ながら)男性もたくさん居ます。真ん中の美人はインストラクターの先生です。

これは早稲田大学の正門で撮った写真の下に四季のカジュアルライフを卒論にまとめたもので文章を入れるということが今は簡単に出来ます。これは俳句の好きな方が写真と俳句を組み合わせて、写俳をつ





くっています。こういった住所録もエクセルなどを使えば簡単に出来るようになっていきます。この楽しい地図、70歳ぐらいの女性が作ったのですが、このようにみなさん元気にパソコンを使っています。これからの高齢化社会で元気に生きていくためにはパソコンはあったほうがいいんじゃないかと思えます。みなさんのお手元に今日はこのオープンカレッジのカタログをお配りしてありますのでどうぞご利用ください。

私自身は団塊5%倶楽部というのを仲間と考えていまして、団塊の世代がこれからの高齢化社会を明るくもするし、暗くもする。団塊の世代は戦争の体験もなく、豊かで恵まれた時代を生きてきた世代として社会貢献に汗を流すような役割があるのではないのでしょうか。

団塊の世代は800万人いると言われていますが、このうち100万人が参加して、高齢化社会を支えています。具体的には、自分の自由時間、例えば一日4時間あったとして、ひと月120時間、おっざぱに100時間あるとして、その5%は5時間ですね。日曜日の半日とかをパソコンの操作をお年寄りに教えたり、商社マンであれば英会話を指導したり、逆に高齢者から日本の伝統的な智慧や作法を受け継ぎ、若い人に引き継いでいこう。そういう世代間が交流していくことにより日本が失いかけているものを取り戻していくことが必要ではないかと考えています。

団塊の世代は定年を迎えるとひょっとしたら引きこ

もりになってしまうかも知れません。高齢者の方へのボランティアとか社会への貢献活動は、自分たち自身の生きがいづくりにもなっていくと考え、全国に呼びかけ「団塊5%倶楽部」略して「団5倶楽部」自分たちの時間をひと月5時間を提供しようということで、日本の足元を見つめ直していきたいと考えております。

**【竹内】** 実際に、商社辞めたてで、ぴんぴんされている方がボランティアで英会話をされたり、NECに勤めてた方がパソコン教室をされたり、ずいぶんありますが、そういった情報はどこに行けば……。

**【桜井】** いやインターネットで調べると。例えば団塊、ボランティアというキーワードで調べるといろんなものが出てきます。

**【竹内】** ありがとうございます。では、玉川さん。

**【玉川】** 最初、私のボランティアの入門のところをお話しましたが、もう80になりますので、そろそろ卒業かと。

先程ちょっと申しました、税金払う側が、さらに税金の負担までしてボランティアしてきた。自動車税が免税にならんかと相談に行ったんです。そうしたら市役所が請願書を出してくださいと言うんです。コチンときましてね。全く同じ活動をしているのに向こうは税金を払わず自動車を使っている。税金を払っている主

権者が、「お願い」というのは嫌になりまして。請願書というのは憲法に書かれた権利だと聞きましたので、最期にその権利を使わせていただきますと、「請願」という言葉を辞めてくださいという請願書を書きました。これ2月26日に出してきました。あと京都府と国に出す予定してます。

もうひとつコチンとききましたのは、特別養護老人ホームは介護保険なんですけど、養護老人ホームというのは、「措置費」なんです。我々は措置費と聞きますと「処理費」と感じるんです。今の日本に貢献してきた年寄りを「処理費」で片づけるのは失礼だと思ひまして、この請願書に措置費は「処遇費」と読みかえてくださいと、そういう言葉が他にも沢山あるので専門家で洗い直してください、その専門家の委員を作ってくださいということも併せて請願書を出しました。

神戸の地震の時には、ボランティア元年といわれました。地震の翌日だったんですが、病院関係のボランティアの拠点づくりに歩いてましたら、「おじさん誰か身内がやられたんか」と聞いた青年が居たんです。その青年は庭師の大きいノコギリと自動車工場にある鉄のバールを持っているんです。「これ何や」と聞いたんです。そしたら、昨日地震のあとに飛び込んでみたら、家の下敷きばかりだったと言うんです。それのお手伝いをしたから、すぐ大阪の吹田に帰って、自動車屋でバールを借り、植木屋でノコギリを借りた。これで、下敷きの木を切ると言うんですね。これで持ち上げる。ジャッキがいる。ジャッキなんかどこにでもある。自動車もみなへたっているから、後ろのトランクをバールでたたくと、パーンと開くそうです。ジャッキなんかいくらでもある。ああ、この青年こそ本物のボランティアだと思いました。

社協やお役所がボランティアで炊き出しをしたのが、十数日後です。東京も地震が怖い時代ですからお願いしたいんですが、ぱっと地震でやられたときに、病院と老人ホーム、子供の施設、ここが昼ですと次のご飯が作れません。炊き出しも来ません。炊き出しは避難所ばかり行きます。そういう施設のための炊き出しをぜひ考えて欲しい。

お医者さんがボランティアで被災地へきます。私も、うちの病院も行ったのですが、健康保険証が使える

のは保険医の資格を持った医者が保健医療機関で使わないと健康保険が使えないんです。神戸であの地震の災害にあいながら、まだその対策はたっておりません。全部、よそから入った医者は健康保険で診てあげられませんので、薬は無償で提供したんです。そういう防災に参加した人の意見が十分に防災計画の中に入ってないと思います。視察に行った大臣や議員ではなく、現地で活動した人の意見を集めて対策をやっていただきたい。神戸の時にイギリスのインターナショナルレスキューコーという救援隊が来ました。救援隊は地震を衛星放送で見て、30分後にロンドンの日本大使館に救援隊を派遣しますと申し込んだんですが、医者は日本の医師免許がないとだめだとか、レスキュー犬は厚生省では解決つかない。日本の縦割り行政は地震担当大臣でも処理不能でした。イギリスのレスキューコーが30分後に日本大使館に申し出ているのに、時の総理大臣は8時ごろになってから「大変な事だな」と言ったんですよ。

そういう市民の本当のNGO活動を市民の中から積み上げていくのが大事だなというのを神戸のボランティアの中で体験しました。特に関東の地震が取りざたされていますが、そういう検討会も市民主導でやっていただき、準備ができますようお願いして帰りたいと思います。

**【竹内】** 玉川さんは何人ぐらいでやってらっしゃるんですか。請願書、反対運動されるんでしょう。

**【玉川】** 請願書は個人の権利らしいんです。とりあえず私ひとりで出しました。

**【竹内】** 80歳までそういったご活躍が出来るというのは、コツはなんですかね。お人柄ですかね。

**【玉川】** いや、なんかしておらんと。壁の中のバカになりたくないという感じだけです。

**【竹内】** 長野さん、お願いいたします。

**【長野】** 創作は特別な人が創るのではなく、誰でも出来ることなんだと思うんです。日常の生活に創作の芽



というのがいっぱいあると思うんで、それに気づいて生活の中に取り入れると生活も楽しくなると思うんです。作品でなくてもそういうことが創作だと思います。私の作品には命をテーマにした作品が多く、「おかあさんがおかあさんになった日」、「おとうさんがおとうさんになった日」とか、これは4月にNHKが取り上げてくださるんですが、小さなこどもは自分が生まれたときのことを聞くのがとても好きなんです。どうしてそんなに好きなのかなという、自分がいかに望まれて生まれてきたかとかいうことを確認したいんだと思うんです。大人でも自分が生まれてこうして生きてきたということの確認はうれしいことだと思うんです。それが生きる力に繋がっていくんじゃないかと思うんです。

生まれるというテーマの本を作るのにお産の取材、自宅出産とかを取材したんですが、赤ちゃんって自分の力で生まれてくるんです。私は赤ちゃんの頭が出てきて、医師なり、助産婦が引き出すのかと思ってたら、自然出産というのは頭がでると自分が今生まれてもいいかどうか確認をするようにひと呼吸おいて、体全体が出て、足の先まで出てから、初めて産声を上げるんです。それを見たときに子供って生まれながらにして、ものごとの状況とかを判断する力というのをちゃんと持っていると思うんです。

子供に何かを教えるのではなく、いろんなものを持って生まれてきてるんだと、いいとか悪いとかの判断も生まれながら持っていると思うんです。で、そ

の本。本って人に読んで貰うと楽しいので、今日はその本を読ませてもらおうかなと思うんです。大人になっても誰かに絵本を読んでもらうのは楽しいと思うんです。今日、嬉しくなるかどうかわかりませんが、一冊読ませてもらいます。

(おかあさんがおかあさんになった日を朗読)

これは、「おかあさんがおかあさんになった日」なんですが、今日私もシニアなんて呼ばれて嫌だなと思ったんですが、シニアになったというのではなく、シニアに生まれたと思ったら、何かウキウキするでしょう。赤ちゃんは生まれるとき、まわりにうれしい気持ちをいっぱい与えてくれますよね、シニアとして生まれたというのなら、まばゆい輝きというものをまわりに与えるのではないかなと思ったり、いろんなことに、生まれたてだから何にだって挑戦できる、これからシニアを楽しもうという感じがする。髪がだんだん白くなるというのは、白くなったらどうなるんだろうと楽しむとか、シワができるとどんな顔に変身するんだろうとか、そういうことを嫌と思うのではなく、なっていくことを楽しんで、私もこれからどう絵が変わっていくのだろうと考えていくとわくわくすると思って、これから楽しんでいきたいなと思います。

家の近くに保育園があって、前を通っていたら子供がお婆さんが通るよと、縄跳びをしていたのによけてくれたんです。私の後ろに誰か居るのかなと思ったら、私のことだったんです。小さな子供が私を見ると、私はちゃんとお婆ちゃんに見えるのだなあとそのときに確認したんです。子供のとき私もお婆さんになるんだなと思ってたんですが、何時なるかというのは想像してなかったんです。

ある日突然お婆さんというのを貰った気がしたんですけど、これからはそれを楽しんでいきたいと思っています。

**[竹内]** どうもたいへんすばらしい絵本をありがとうございます。読み方が涙が出るぐらい良くて、たいへんありがとうございます。

現在ガイア思想がございませぬ。地球全体がひと



つの生命体であって、良く知りませんが地球は今から20億年前かそこら太陽の発熱量30%高くなっても短くても、水の量が一定であって生物が生存できるような条件が出来上がっていて、その中で木があって、動物がいて、木が酸素を出して、我々がそれを吸って、全体としてバランスが活きていて、その中にはプランクトンのように、ただ食べられるだけの様なものもいたり、その頂点に人間がいて、死んじゃうとバクテリアかなんかに食われちゃうという順番に循環しながら、地球という生命体が守られている。その中で我々は生まれ、死んでいくんだという、ガイア思想というのが、このごろ随分流行っているようです。最近では宗教、特に仏教ブームであります。全体としてみますと世の中が行き詰まった感があります。現在のような鳥インフルエンザが出たり、肉骨粉で変な狂牛病などが出たり、我々のように清潔過ぎますと、抵抗力がなくなって、花粉症にもなりますし、動物としても変になったんじゃないかと考えるんです。今考えますとその思想にも通ずるような出産のすばらしさがあるような感じがします。こんな印象で長野さんよろしいでしょうか。

それで、もう時間になりましたので、私の若干の考え方と整理をさせていただきたいと思います。

今日のパネラーの先生方いずれも内在的に好きな

ことをおやりになっていた。その好きなことが老人になっても結構出来る。そんな蓄積が一貫してされていた気がします。ちょうど北川さんのように仕事が好きでしかたがなくて、ひとつ譲られても次を起してしまう。そのようなことで、ご自分に近いマーケットを築かれていった。私の一生もそれかなという気がします。

銀行に入ってラッキーなことに銀行の仕事がまるっきりだめなものですから調査部に追いやられて、幸せにもずっと調査部にいて、しかも人事異動の時にどの部からもあいつだけはいらないとわれ、ずっと調査部にいた。現在の分析できる材料を使うことが重要で、銀行時代ですと設備資金専門の供給銀行でしたので産業が一番強いということで特化する。石油危機だったらアラブへ飛んでいく、中国に国交が出来そうになったら、中国に飛んでいく、そのような目新しいマーケットがあって、老人になれば老人のテーマを取り上げていくというのがひとつのいきかたかと思えます。

現在私が取り上げているテーマは一生を考えますと調査、スキーが大好きですから、他はやりません。ゴルフはやりませんし道具を触ったこともありません。先程の話に通ずるところかもしれませんがゴルフ

の向こうには爆撃した占領軍の姿が浮かぶのでどうしてもあれは出来ないな、特に芝生に球が転がったと言えばいいものを、グリーンにオンしたなんて、とても恥ずかしいような言葉が使われているわけで、じゃあ、スキーはどうなのかと言われますと勝手にスキーはそうじゃないと決めただけです。

スキーをやりますと、スキーの本を書けばいいんでスキーの経済学というのは日本に一冊しかございま

静岡県ですが、神奈川はインチキで工場はありますが本社はみな東京、静岡県といえば、ホンダ、スズキ、ヤマハ、カワイとかの国際企業がたくさんありますから、静岡県の研究をすれば同時に日本の研究にもなる。そして静岡の資金は静岡に投入すべきと、他に使ったら勿体ない、というわけで、私も東京でバーに行くときは、静岡出身のバーにしか行きませんし、料理屋もそうです。(会場笑)



せん。それによって海外とのネットワーク、海外のスキー場を回るとか、日本の三浦雄一郎さんとか懇意になったりする。

もうひとつの拠点は故郷にしかありませんから、そこから頼まれたことは全てオッケー。歳をとってからでは意味がなくて、現役の一番忙しいときに講演などを受け、約束は必ず守っていくと評価してくれる。歳をとったから、暇になったから来たよと言ってもいらなと言われてしまう。老後をどうして生きるかとなりますと、40代、50代の働き盛りのときにコツがあるということなんです。

80年代は清水市のサッカーが一番強かったので、清水東高、清水商業がいつも決勝に出る、その時には必ず行く。そんなことで基盤をつくるのです。スキーでいえば、白馬村に囲炉裏塾の塾長、安塚町の雪だるま財団の理事、アメリカのコロラド州のアドバイザーなどやっておりますと清水の人が白馬でスキーを習う、白馬の人が清水でサッカーを習う、という繋ぎの役目が出てくる。

製造業で日本一は愛知県、二番は神奈川、三番が

投資クラブというのをつくり、その理事長になる。その投資クラブというのは毎月1万円ずつ出して、11人ぐらいでどの株を買うか多数決で決める、ひと月にいっぱい、そこで株式の勉強をし、知識が増えてくる、お金が関係するから出席がよく、議論の果てに仲良くもなる。3年ぐらい運用してうまく儲かれば海外旅行などに行く、4年も5年も続けると喧嘩になるので、3年ぐらいで解散をする。こういう会もいいのではないかと思います、株を買うには会社を知らなくてはいけませんので、静岡県の会社なら静岡の人は近所の工場を回って歩く、すると工場の状態がよく分かるようになる。その地域の人には地域を考えながら、老人は会社を訪問し現実の社会と接しながら活躍ができるようになると思います。

我々の任務としては、8月15日のことが重要です。私にとっては7月7日が重要です。清水市が爆撃されて全焼した日です。その時自分が何をして、どこに逃げて、どうしたんだという手記を書くという運動をしております。そうするとアメリカ軍は何をしたか、我々はどうしたかということが、史実として残ってくる。できれば、どこ



の町でも村でもそういうものを残していくことが我々の任務なのではないかと思ひその仕事をしています。長銀が潰れたときの政府の試算が負債超過が2千億円で救済するために国は5兆円使った。4兆8千億円はどういう責任か、どういうミスをしてそうなったか、これも因縁ですが、年寄りになりますとそのような恨み辛みを調べながら憂さ晴らしをするのもいいのかなと感じております。

このようにいろんな考えで、多々生き方もあるなど考えるのであります。

**【司会】** ありがとうございます。

それでは、せっかくですから、質疑応答へうつらせていただきたいと思ひます。

先生方に質問がある方、挙手願ひます。

**【質問者】** このメロウの題に、脱シニア宣言というのがありました。この「脱」というのを取っていただけませんか、官民一体のシニア宣言という今までのいいと思うんです。

結局、シニアってのは仕事しないから、何かやらないからダメだという感じがあります。皆さんから為になる、有益な、そして仲間が居るなという感じがして非常に良かったと思ひます。

**【竹内】** 私もよくわからないところなんです。年寄りはそのまま、大事に、手厚くしておけばいいというのが若い人の考えだと思ひます。親切にし、シルバーシートをつくり、エスカレーターをつくり、そうすれば幸せなんじゃないか、でもそうではないらしいという感じ

がする。多くの人はまだ働きたいわけです。自己実現をしたいわけです。

最近是我々は人為的に壁をつくって、うちのうち、外はどうでもいいと、近所づきあいもなく、ばらばらに生きている世界になった。そのようにばらばらに生きながら、老人だから親切にしようといろんなことをやっても、老人は幸せにはならないのではないか。老人が闇雲に増えていく時代に、今までの扱いだと犬、猫と一緒に食うだけで何もしないわけですから、国が衰えていくのは当然です。



ですから、力に応じてやったらどうか、静岡県の遠州の山間地は異常に長生きで、寝たきり老人がほとんどいない。何故かという山の仕事があって、簡単な作業なら80歳でも出来る。第3セクターで多少のものを貰って仕事をしていけば、社会と接しますし、自分の技術が生きますから、この人たちはずっとぴんぴんしている。

養老先生の話ではないですが、死にそうになった人の気持ちは分からないのと同じで、若い人には老人の気持ちは分からない。どうも温室にに入れておけばいいと、それは間違っている。分からなければ、実例で示すしかないのかなと思ひます。

今日の先生方はまさに実例で示された。そのためには働かなくてはいけない、一日おきに働いてもいいし、その若干の所得を得たときに社会との関わりを実感できるのです。老人でもできるということを若い人に示していかなくてはならない。

【司会】ほかに質問のある方、この機会ですから、ぜひ。

【質問者】北川先生のやってらっしゃるような介護関係の施設などの発明。風呂から出るときにちょっと掴まるものがない。起き上がるときに、ヒモが降りてきて掴まるとか、1本でもあると非常に楽になるのですよ。そういう発明をして、販路、顧客をみつけるとかを行政が援助する体制、またそういう発明に対する特許など、歳をとって体がいうことを利かなくなっても智慧を売ることができるということを知らしめて欲しい。

【竹内】ご指摘のとおりですが私は役所に頼ってはだめだと思う。やってる人が若い人ですから。だから役所も80歳まで人を雇え、収入は普通の人の20分の1でいいんですよ。分相応に働いて、分相応のニーズに応じていく。

例えば完全自動掃除の機会が1千万で出来た。毎

日使わなければ償却できない。みんなが効率よく使うにはどうしたらよいかということに老人の智慧を使う。車椅子だっていつも使って、いつも押している人の方が性能を理解しているのでその意見を採り入れていくときに老人が機能していく。

老人のパワーを強くしていかなくてはいけない。そのためには役所に老人が働けるようにならないと役所は老人のものにはならないという感じがする。

【司会】ありがとうございました。以上で質疑応答を終了させていただきます。

本日は素晴らしいお話をありがとうございます。会場のみなさまもご家庭で、会社で今日のシンポジウムの内容についてお話いただければと思っております。

それでは、竹内様、パネリストの皆様ご退席となります。盛大な拍手でお見送りをお願いいたします。

以上をもちまして本日のメロウ・シンポジウム終了させていただきます。最後までのご参加ありがとうございました。

パネリスト敬称略



## 制作物



## メディア掲載



朝日新聞2月18日夕刊「マリオン欄」



月間ケアマネジメント2月号



時事通信社から配信し  
西日本新聞4月1日に掲載



暮らしとパソコン4月号



シルバー新報2月20日



ご案内状



ご招待券



ホームページ



ご案内DM・封筒



プログラム



編集・発行

財団法人 ニューメディア開発協会

〒108-0073 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル23階

電話：03-3457-0673 FAX：03-3451-9604

発行日2004年3月

この報告書は競輪の補助金を受けて製作いたしました。



禁無断転載・複写複製



この事業は、競輪の補助金を受けて実施したものです。